

石田収蔵の野帳等資料の紹介 － 20 世紀前半の樺太先住民族の暮らしの風景 －

Fieldnotes of the 20th Century Anthropologist "Ishida Shuzo"
- Sketches and Notes About Indigenous Peoples' Life in Sakhalin in the First Half of the 20th Century -

是澤櫻子¹⁾ (KORESAWA Sakurako)

国立アイヌ民族博物館 アソシエイトフェロー (Associate Fellow, National Ainu Museum)

細樫雄貴²⁾ (HOSOMOMI Yuki)

板橋区立郷土資料館 学芸員 (Curator, Itabashi Historical Museum)

キーワード：石田収蔵、野帳、樺太先住民族

Key Words : Ishida Shuzo, Fieldnotes, Indigenous Peoples in Sakhalin

1. はじめに

本稿は、20 世紀初頭から中頃にかけて樺太の先住民族を調査した石田収蔵の野帳資料の翻刻を通して、そこに記録された民族誌的情報を整理することを目的とする。石田収蔵（明治 12〔1879〕年－昭和 15〔1940〕年）は生涯で計 5 回、樺太調査を行った。最初の調査が行われた 20 世紀初頭は、調査ノートによる詳細な記録や写真機材による近代的な学術調査が始まった時期であった。石田の写真は当時の本格的な機材と優れた技術力を以て、樺太先住民族の生活風景を捉えたという点で学術資料として高い価値を有しており、全 3 冊ある野帳資料にも詳細な記録がみられる。本稿は、石田の野帳資料のうち、明治 42（1909）年から大正元（1912）年の調査を中心に記録したと考えられる「野帳 2：北海道、樺太調査野帳」（板橋区立郷土資料館所蔵）（以下、野帳 2 とする）を翻刻し、関連する写真資料（公益財団法人アイヌ民族文化財団所蔵）を添付した。これらの情報は、20 世紀前半の樺太南部におけるアイヌ、ニヴフ、ウイльтаの暮らしに関する民族誌を充実させるという点で意義がある。

2. 石田収蔵について

2.1. 経歴

石田収蔵は、20 世紀初頭から中頃にかけて活躍し

た人類学者である。明治 12 年（1879）年 3 月に秋田県鹿角郡柴内村（現、秋田県鹿角市花輪）に生まれ、明治 34（1901）年に東京帝国大学理科大学動物学科に入学した。明治 38（1905）年に大学院進学過程で人類学へ転向し、日本の人類学の草分け的存在である坪井正五郎に師事した。石田は、坪井が東京帝国大学で担当していた人類学教室に大学院生として在籍しながら樺太調査に同行したほか、東京人類学会の幹事などを務め、学会誌『東京人類學會雑誌』（後の『人類學雑誌』、現在の Anthropological Science の前身誌）の編集を担当した。大正 9（1920）年に北豊島郡赤塚村徳丸（現、東京都板橋区徳丸）に住まいを構え板橋で余生を過ごし、昭和 15（1940）年 1 月に生涯をとじた。

石田は明治 40（1907）年から昭和 14（1939）年にかけて計 5 回、樺太調査を行っている（【表 1】）。明治 40（1907）年の坪井正五郎の調査では、写真係として調査に参加した。その後も個人調査を含め 4 回樺太に渡り、多くのメモ類や写真資料を残した。

2.2. 石田収蔵資料の位置づけと本稿の意義

20 世紀前半の樺太の先住民族の暮らしについて豊富な資料を残した石田だが、博士論文を執筆する前に逝去したため、自らの手で研究の全貌が公表されることはなかった。その功績に光が当てられるようになったきっかけは、平成 5（1993）年に石田が余生を過ごした板橋の家屋の整理に伴い、軽トラック 1 台程

表 1 石田収蔵の樺太渡航歴と概要、関連する野帳資料（小西（2012）に基づき著者作成）

	期間	内容	関連野帳
第 1 回	明治 40（1907）年 7 月～10 月	坪井正五郎の調査に写真係として参加	野帳 1
第 2 回	明治 42（1909）年 7 月～9 月	個人調査	野帳 2
第 3 回	大正元（1912）年 8 月～9 月	人類学教室代表として拓殖博覧会に伴う調査、出演交渉	野帳 2
第 4 回	大正 6（1917）年 7 月～9 月	個人調査か	野帳 2
第 5 回	昭和 14（1939）年 7 月～9 月	『内外土俗品図集』資料収集と自身の博士論文の集大成か	野帳 2, 3

の資料が板橋区立郷土資料館に寄贈されたことである（小西 2000：6-7）。その後、平成 12（2000）年の特別展『石田収蔵 謎の人類学者の生涯と板橋』や平成 16-17（2004-2005）年の巡回展『樺太アイヌ民族誌——工芸にみる技と匠——』により、石田が残した各資料が分析されたほか、樺太調査の行程が明らかにされた（野帳 1 の概要〔佐々木 2000〕、採録されたウイльта語資料〔池上 2000〕、足型資料〔河内・持丸 2000〕、吉田巖関連資料〔小西・内田 2002〕、調査行程〔小西 2004〕）。また、2012 年には資料の中でも膨大な量を占めるはがき資料が翻刻され、石田と関わりのあった当時の研究者とその交流の様子が明らかにされた（守屋〔編〕2012）。同年にはアイヌ文化振興・研究推進機構が収集した 252 点の写真資料の紹介と分析が行われた（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構〔編〕2012）（小西 2012）。

以上の先行研究により、石田が樺太南部の先住民族の文化や生活について質の高い記録を残したことが明らかにされ、人類学者としての功績が評価されつつある（例えば岸上・佐々木 2011）。しかし、筆者らは更なる研究の余地があると考ええる。石田の資料は、当時の和人研究者のみならず樺太に関心を寄せた海外研究者（プロニスワフ・ピウスツキ、ヴィクトル・ヴァシーリエフなど）とも時代を共にしており、同時代資料の比較研究というテーマに貢献できる。それらのデータと補完し合うことで、樺太の先住民族の暮らしの風景を再現するとともに、当時の資料収集の様子を再考することができると考える。

特に後者（資料収集の経緯）の観点は、博物館資料と植民地主義の歴史的な関係を考える上で重要である³⁾。資料収集は、所有者である先住民族の協力や同意なしには成立しないはずだが、経済的、社会的な立場の違いが所有者の意にそぐわない形の収集につながる場合もあった。例えば、石田の第 3 回調査と同じ

明治 45・大正元（1912）年に北海道と樺太を調査したロシアの民族学者ヴィクトル・ヴァシーリエフの旅記には、当時の資料収集の様子が詳細に書かれている。彼の購入の申出を快諾し自ら品物を売りに来る人々、値段を交渉する人々、自分たちの大切なもの、神聖なものを何としても渡そうとしない人々など、地域によって対応が大きく異なっていた（ヴァシーリエフ 2004）。果たして、我々が現在見ている資料はどのような交渉を経て残されたものなのだろうか。これは生活道具などのモノの収集に限らず、現地の生活の様子など民族誌的な情報を書き伝えた資料にも共通する視点だと考える。当時の海外研究者の資料と石田の野帳、日記類、雑記類、資料購入の価格表などを合わせて分析すると、資料収集に際してどのような交渉があったのかが同時代的な文脈でみえてくるかもしれない。

以上の研究動向と問題意識を背景に、筆者らは石田の野帳資料の翻刻と整理を試みた。野帳資料は、板橋区立郷土資料館が所蔵しており、「野帳 1：1907 年の調査に関する野帳」「野帳 2：1909 - 1939 年の調査に関する野帳」「野帳 3：台湾・樺太調査に関する野帳」の全 3 冊がある。野帳 1 については佐々木利和氏（2000）の部分的な紹介がある。野帳 2 はスケッチと翻刻の一部が CD-R 化されたが、年代や描かれた内容の特定などいくつかの課題を残している（佐々木 2002:15）。以上のことから、本稿は野帳 2 の年代の特定と全頁の翻刻を試みた。加えて、広く活用を図るため、野帳 2 の全頁を写真と翻刻文付きで掲載した。

3. 野帳 2：北海道、樺太調査野帳について

3.1. 資料概要

野帳 2 は横 18.5cm×縦 14.5cm、厚さ 1.5cm で、合計 96 ページある。そのうちメモやスケッチの記載が確認できたのは 77 ページあった。また本文とは別

に、人物の似顔絵、景色のスケッチ、トナカイと橇のスケッチと各部位の名称、古写真3枚、野帳2の破れたページが同封されていた。破れたページ以外の同封物は今回の翻刻の対象から除外している。

野帳の記述内容等から総合的に導くと、野帳2は明治42(1909)年から昭和14(1939)年にかけて書かれたものである⁴⁾。年代や地名の記載が断片的であるため、複数年にわたって使用されたメモ帳のようなものだったのであろう。1から16は主に第2回調査(明治42〔1909〕年)、17から28は第3回調査(大正元〔1912〕年)の内容⁵⁾が中心に書かれており、34,35は第4回調査(1917〔大正6〕年)の記録、36は第5回調査(昭和14年〔1939〕年)の記録だと推定できる。

3.2. 民族誌的情報

野帳2にはアイヌ、ニヴフ、ウイльтаの住居、信仰などに関する民族誌的情報が記述されていた。民族名称について、野帳2では主に「ギリヤーク」「オロッコ」が用いられていた。翻刻では石田の記述通りに記したが、本節では現在の民族名称との関連を分かりやすくするため、ギリヤークをニヴフ、オロッコをウイльтаとして記述する。また、地名は野帳の記載に合わせてカナ表記で記述する。

〔住居と間取り〕アイヌ、ニヴフ、ウイльтаの家の外観や間取りに関する情報が記載されていた(5,6,19,22,24,30,31,33,34)。この内、地名が分かるのは19(ナヨロ)、22(シララカ)、24(シララカ)、30(旭川)、34(ホーエ)である。また、19,24,30,33には当時使用されていた生活道具の名称が記されている。5は「ガス s キー」(棟木)の単語から判断して、ニヴフの冬の家の外観と内部構造かと考えられる。19はナヨロのアイヌの冬の家(トイチセ)の内部である。24はシララカの「酋長」の家で、家具の配置がスケッチされている。30は旭川のアイヌの「酋長」の家の間取りと家具がスケッチされている。33は円錐形の丸小屋であることからウイльтаの冬の家かと考えられる。34はニヴフの夏の家の外観と寸法などが記されている。

〔信仰〕アイヌ、ニヴフ、ウイльтаの信仰に関する木偶やイナウなどのスケッチ、「シャーマン」に関するメモが記載されていた(8,9,10,11,14,16,17,24,25,33,34,35,38,39)。8「女ハ腹悪キ時」、14「オロッコ 子供病

気ノ時父ノ作タレモノ三ヶ頭ニ下ゲ 置き或ハ時々頭ヲナメル」など、用途が記されている場合もある。また、39のようにシャーマンが太鼓を叩き、腰をふりながら炉の周りをまわる様子を記したメモもある。

〔仕掛けわな〕(2,10)について、2は仕掛け弓の構造が描かれており、部位ごとの寸法とアイヌ語、ニヴフ語、ウイльта語の名称が記されている。10はテンの罠を仕掛ける場所などを説明している。

〔トンチ〕(19,20,24)は、当時の人類学界で注目されていた「コロボックル」の樺太での名称である。トンチの記述について、19はナヨロのワレラから、24はマヌイのトヤテノから聞いたトンチに関する話が記述されている。20は北海道の「コロボクグル」と樺太の「トンチ」の違いについてのメモである。

〔衣服〕(17,24,32,36)について、17はニヴフのズボンについてのスケッチ、24はニヴフ、ウイльтаの男女の服装、素材について述べている。32はウイльтаの衣服かと思われる。36はアイヌの帽子の色と寸法が描かれている。

他にも、ゆりかご(14,15)、食(20)、ソリ(24)、植物(37)、トナカイの生態(39)、魚(41,42)に関する記述があった。

3.3. 野帳2から読み取れる石田の調査の様子

野帳資料には、先述のように暮らしの道具のアイヌ語、ニヴフ語、ウイльта語名称や家の間取り、構造などが記されていた。イラスト付きの短いメモが多く、現地住民とどのような交流をもったのかを伺える記録はごくわずかであった。しかし、数少ない記述でも石田のはがき資料(板橋区立郷土資料館蔵)と合わせると調査の詳細な様子が分かるものもある。例えば野帳2_34の記述は、石田が第4回調査の際に、ニヴフのボーコン氏の家を訪れ滞在したときの記録だと考えられる。その時の調査の様子を、石田は家族や自分に宛てたはがきに詳細に記している(守屋〔編〕2012)。以下にはがき資料(No.0756-0758)に記された内容をまとめた。

大正6(1917)年8月下旬、石田はシスカから丸木舟でポロナイ川を上ってホーエに行くことを決めた。通常は5泊6日かかるところ、石田たちは2泊3日という速さでたどり着けたという。3日間の移動がはじまる前夜、ポロナイ付近に野営した石田は蚊除けの用意がなかったため眠れず、かなり疲弊していた。翌朝

6時に出発し川を上り、午後4時半頃に川岸に丸木舟を止めると、舟の漕ぎ手をしていた先住民族たちは柳の木を柱にして周辺の草を集めて天幕をつくり、火をたいて夕食を準備してくれたという。おかげでその日は蚊に悩まされることなく朝を迎えた。3日目は川の流れが強く、漕ぎ手たちは櫂の使用をやめて流れにあわせて舟を進めた。漕ぎ手たちのその手腕に石田は感嘆の意を表している。3日目の午後4時には快晴のなかホーエに到着した。石田は通常の予定より大幅に早く到着したことに対し、いかに漕ぎ手たちが自分のために舟を急いでくれたかを証明しているとし、喜びを表している。

ホーエにはニヅフのボーコン氏が住んでいた。ボーコン氏は明治42(1909)年以降、石田の調査の案内をした人である(小西2012:128)。石田の突然の来訪に対し、ボーコン氏は「意外なる来客にて驚き且つ喜び直ちにそのヤカタに荷を運ばせ」た。石田はホーエに3泊し、川を下ってシスカに戻った。下りだったため帰りは1泊2日で着いたが、その間の1泊は肌寒い夜で、川岸近くの3坪ほどの空き家に宿泊し、蚊に悩まされながら夜を過ごした辛さを綴っている。野帳2_34は、石田が訪れたボーコン氏の夏の家の外観のスケッチ、内部の構造、作り方を記したものだと考えられる。

これらの記述からは、樺太の慣れない自然環境に対し、石田が先住民族に大きく助けられて調査を遂行した様子が分かる。このように、石田の資料は今後十分に検証すべきものが多くある。

4. おわりに

今回、野帳2の翻刻により20世紀前半の樺太先住民族の暮らしに関する民族誌的情報を整理した。それぞれ断片的な記述ではあるが、アイヌ、ニヅフ、ウイルトの暮らしの道具や名称を詳細に記し、スケッチをした点は、当時の生活像に迫れるという点で意義がある。石田の調査の様子は野帳だけで読み解くことは難しく、はがき資料と合わせることで詳細な様子が分かる場面もあった。これらは未だ翻刻されていない日記資料と合わせると、さらに鮮明な姿が浮かび上がるかもしれない。今後は言語学的なアプローチを含めた分析を行うとともに、残りの野帳の公開に向けて翻刻を進めたい。

謝辞

本稿は、令和2年度国立アイヌ民族博物館の個別研究(B)7の「石田収蔵の野帳等資料を中心とした20世紀初頭の樺太先住民の民族誌に関する文献研究」(代表者:是澤櫻子)の成果に基づくものである。本稿を執筆するにあたり、内田祐一氏、神子美涼氏、小西雅徳氏、佐々木享氏、笹倉いる美氏、志田奈津紀氏、杉山宗悦氏、田村将人氏、中村新之介氏、樋口五月氏にご協力やご助言を頂いた。また、博物館と収集資料をめぐる議論について、Daan Kok氏、北原モコットウナシ氏、谷地田未緒氏から様々なアイデアを頂いた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

注

- 1) 国立アイヌ民族博物館 アソシエイトフェロー
- 2) 板橋区立郷土資料館 学芸員
- 3) 博物館と脱植民地化をめぐる議論では、博物館資料の来歴を明らかにすることの重要性が長らく指摘されてきた(Macdonald et al.2017)。資料の来歴を明らかにすることは、博物館の歴史的な責任を再考し、資料の現代的な意義を引き出すためにも重要であり、フランスやオランダ、カナダなど積極的な姿勢を示す国や機関もある(例えばSarr and Savoy2018; NMVW2019; Jisgang et al. 2019)。国内でも文字記録や写真、映像資料については、ニール・ゴードン・マンロー資料をめぐる一連の実践のように資料の協働分析やデジタル化による知識の返還が議論されてきた(手塚2011; 出利葉2011; 内田2020)。
- 4) 年代は、主に翻刻文に記された情報を基に判断した。具体的には、野帳2_9(以下、「野帳2」)省略:写真90022(裏書「42年」)と一致、17.25:「45年8月13日」、30:「43年6月に写」、35:「大正6年9月」、36:「昭和14年7月」である。また、場所についても地名や風景画などから判断できるものがあった(2[栄濱]、13[タライカ、ナヨロ:水彩の風景画]、18[シスカ]、19[ナヨロ]、20[サクコタン]、21[シルトル岬]、22,23[シララカ]、24[シララカ〜マヌイ]、26[アラコイ]、28[ラクマカ]、28[コルサコフ]、29[陸奥(八戸か)]、30[カモイコタン]、34[ホーエ]、36[豊原])。
- 5) 従来、第3回調査の行程はコルサコフから西海岸、東海岸へ行きシスカへ北上するルートだとされていたが(小西2004:121)、はがき資料と野帳2の記述を読むとコルサコフからサカエハマを経由しシスカへ行き、東海岸、西海岸へ南下していく行程である可能性が出てきた。はがき(No.0773、0673)では8月10日にサカエハマから「今晚乗船北進」し、8月15日にシスカからはがきを送っている。野帳2_18ではシスカから「南下ノ途」に記載したメモがある。これらの記述に基づき、本稿はシスカから南下した行程であることを想定して17から28頁を第3回調査の記述だと判断した。

参考文献

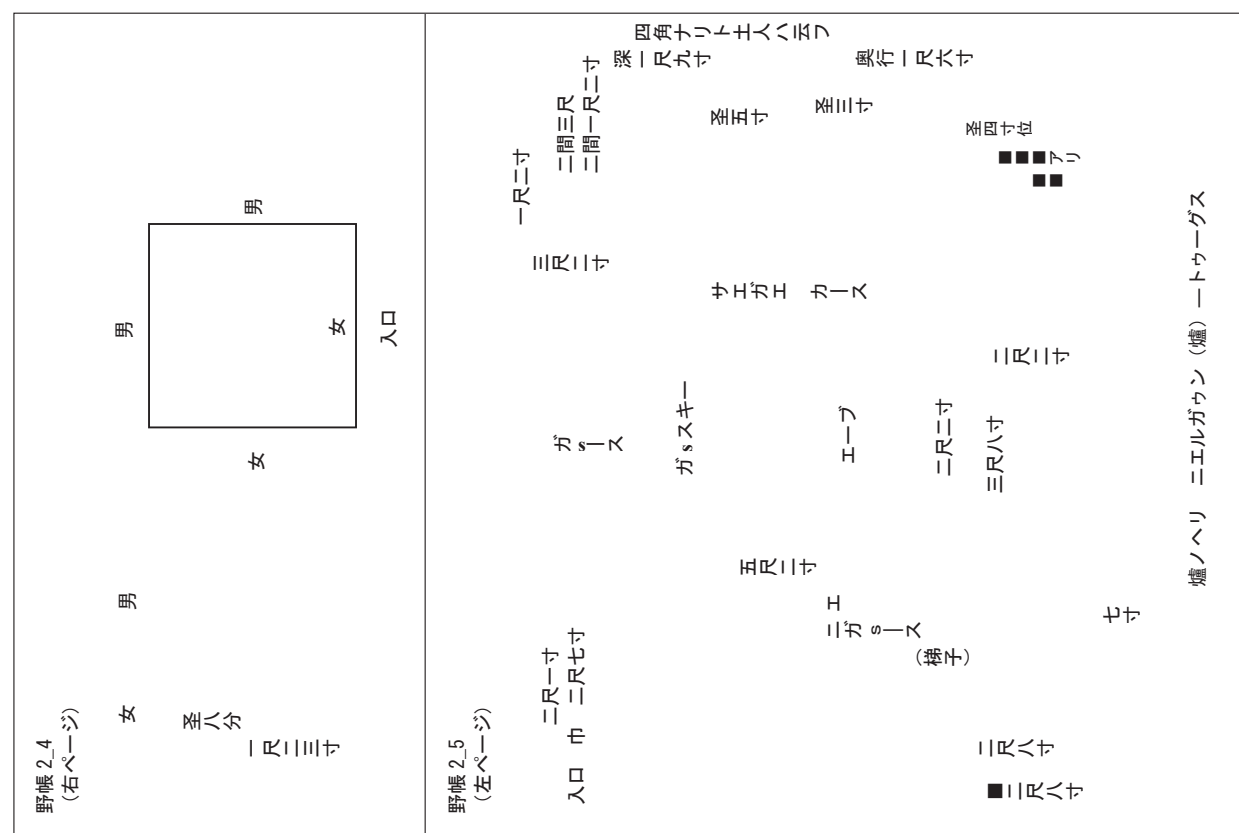
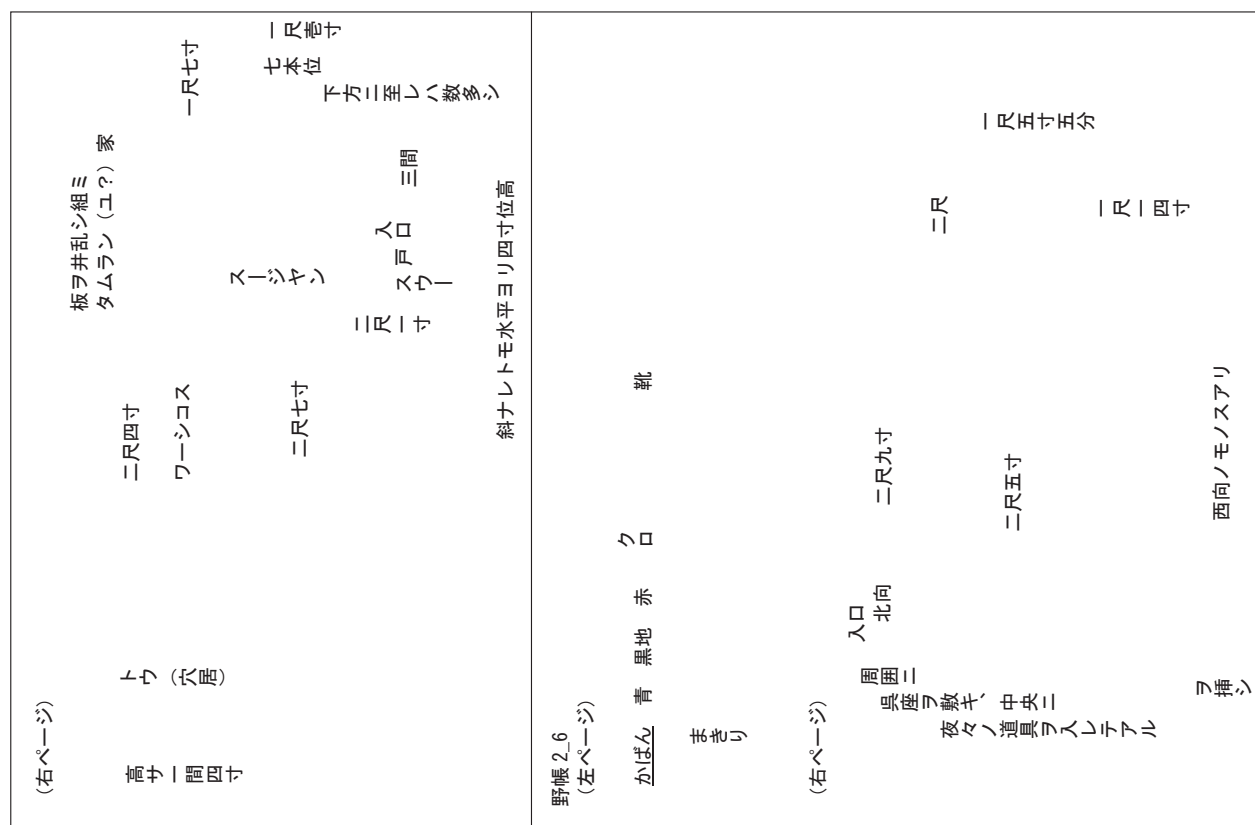
- ヴァーシリーエフ、V.N. 2004 「エゾおよびサハリン島アイヌ紀行」、荻原眞子訳『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』10:153-177
- 池上二良 2000 「二十世紀初期石田収蔵氏採録のウイルト語資料について」、小西雅徳(編)『石田収蔵 謎の人類学者の生涯と板橋』pp.87-91、東京:板橋区立郷土資料館

- 内田順子(編)、国立歴史民俗博物館(監修) 2020『映し出されたアイヌ文化: 英国人医師マンローの伝えた映像』吉川弘文館
- 河内まき子、持丸正明 2000『石田収蔵の集めた明治時代末期のサハリン南部における少数民族の足型』、小西雅徳(編)『石田収蔵 謎の人類学者の生涯と板橋』pp.100-105、東京: 板橋区立郷土資料館
- 岸上伸啓、佐々木史郎 2011『19世紀末から20世紀前半にかけてのアイヌ研究とアイヌ資料の収集 ——ドイツコレクション展示の背景として——』、財団法人アイヌ文化振興・推進機構『千島・樺太・北海道 アイヌのくらし——ドイツコレクションを中心に——』pp.127-134、札幌: 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
- 小西雅徳 1996『石田収蔵とカラフトの調査』『北方博物館交流』9、北海道博物館交流協会
- 2000『石田収蔵 謎の人類学者の生涯と板橋』東京: 板橋区立郷土資料館
- 2004『東京人類学会と樺太調査行』、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構(編)『樺太アイヌ民族誌 ——工芸に見る技と匠——』pp.118-123、札幌: 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
- 2012『石田収蔵と写真記録』、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『収蔵品目録7 石田収蔵旧蔵写真』、pp.120-131、札幌: 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
- 小西雅徳、内田祐一 2002『板橋区立郷土資料館所蔵の石田収蔵資料に含まれていた吉田巖関連資料について』『帯広百年記念館紀要』第20号: 57-62
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構(編) 2012『収蔵品目録7 石田収蔵旧蔵写真』札幌: 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
- 佐々木亨(編) 2002『北海道大学大学院文学研究科 平成13年度プロジェクト研究 サハリン少数民族の文化に関する文学的研究——石田収蔵資料のデジタル化——報告書』北海道大学大学院文学研究科 北方文化論講座
- 佐々木利和 2000『隠れたる先達石田収蔵先生』、小西雅徳(編)『石田収蔵 謎の人類学者の生涯と板橋』pp.106-112、東京: 板橋区立郷土資料館
- 手塚薫 2011『伝統的知識の公開と「社会関係資本」としての活用: UKにあるマンロー書簡の社会ネットワーク分析を中心に』『国立歴史民俗博物館研究報告』(168)pp.33-62、千葉: 国立歴史民俗博物館
- 出利葉浩司 2011『マンロー・テキストはなにを「返還」するのだろうか マンロー関係資料デジタル化プロジェクトの今日的意義』『国立歴史民俗博物館研究報告』(168)pp.63-82、千葉: 国立歴史民俗博物館
- 守屋幸一(編) 2012『明治・大正期の人類学・考古学者伝 板橋区立郷土資料館所蔵 石田収蔵氏 旧蔵はがき資料集』東京: 板橋区立郷土資料館
- 山本祐弘 1948(1997)『樺太原始民族の生活』『アルス』(谷川健一(編)『日本民俗文化資料集成 第23巻 北の民俗誌——サハリン・千島の民族——』pp.165-186、東京: 三一書房)
- Jisgang Nika Collison, Sdaahl K'awaas Lucy Bell, and Lou-ann Neel (prepared) 2019 Indigenous Repatriation Handbook, Victoria: The Royal British Columbia Museum
<https://royalbcmuseum.bc.ca/first-nations/repatriation-handbook> (accessed January 30, 2022)
- Macdonald Sharon, Lidchi Henrietta, and von Oswald Margareta. 2017. Introduction: Engaging Anthropological Legacies toward Cosmo-optimistic Futures? *Museum Worlds*, 5(1), pp.95-107.
- NMFW (The National Museum of World Cultures) 2019 Return of Cultural Objects: Principles and Process Nationaal Museum van Wereldculturen
<https://www.volkenkunde.nl/en/about-volkenkunde/press/dutch-national-museum-world-cultures-nmfw-announces-principles-claims> (accessed January 30, 2022)
- Sarr Felwine and Savoy Bénédicte 2018 The Restitution of African Cultural Heritage. Toward a New Relational Ethics. <http://restitutionreport2018.com/> (accessed January 30, 2022)

翻刻文

(右ページ)		A , G , 0 , 開示 0 , G , トーロル ドウシゲル	
?		A?	
コボックス (G) コクーワ (A) ユーレリ ウオリッダー (0) ユーロル (A) ポント (G)		(G) チェムゲス テーヴントウ (0) ペーナル ハララ	
ブリハ (0)		ゼムグスボックス (G) チヤグラへシヨクレシヨニ (0)	
フホツレー (G) ケキフ (G) ガートウ (A)		チヨントマ (A) ゲーテ (A) ジェムグス (G) クキンヨウリ (G) チヤガラー (0) トダ (0)	
トッホ (G) セルー (0)		アイソ (A) ゲーテ (A) グスー (G) クキンヨウリ (G) ボーラ (0) トダ (0)	
ドムラハスボックス ドルマウス (G) ベームモブ (0)		ゼムグスボックス (G) チヤグラへシヨクレシヨニ (0)	
野帳 2_3 (左ページ)		ひも (古●ぶとう) をくそじ)	
まきり (セナノ)		ゲーシヨフニ	
ちや (古●ぶとう)		ゲーシヨコフトウ	

野帳 2_1 (右ページ)		赤 赤 臺 ドホハパ ウスエクー ケム フニトニシブト	
ムト			
野帳 2_2 (左ページ)		栄濱ヲ見ル 弓矢 (全ク古キモノ) なわ 太サ 一分五寸	
五尺四寸五分		厚サ七分 巾一寸	
二寸		中央部	
八分		八分五リ	
三分強		三方二	
五分		二尺二寸強	
木		金	
?		コウス (G) ペンノウリ (0)	



[illegible][illegible]

(右ページ)	タライカ部 オロソコ	病氣ノ時	アザラシ	月二見ユル人形
	ロクタタマ島 カソコ河石			
			一尺、五分	
野帳 2_12 (左ページ)	トヤノ	新 村	湖	
(右ページ)	十川田 田長田	海		アイヌ村マテ十町
	ニナシ		田平	
	堅ノ水		滝	
野帳 2_13 (右ページ)				タイカ島 遠ク見ユル山
				八ノ月 ハナヨロ
				漁場 以ノ
				ツノ 南ノ
				連山

(右ページ) 冬ハ足あとヲ覓 夏ハ其眞ヲヲ覓字わなヲカケル川ノイタルトコロニ自終ニ倒レタ木カナケレハウサウサ獲シヲカケル 一ヶ処ニ共同ニテスルコトアリ各自ノヤリ方ハ多少異ル故間違ヘルコトナシ 小サキあまつ世ニテ捕フルアリ、てんハ岸山鳥ヲ食ス、木ノ纏トカズ、根ノ下ナトニ棲ム 二三里間カクニテ各 旧 半月マ子 自ノ持場ヲキメ、四日 月ヨリ初メ九月ノ中頃ニテ止ム 目位毎ニ其間ヲ巡廻シテ覓ル 長キ棒 軽ノ木ナル ギリコツシ大ニテ可ナリ 三寸五分 八寸位 川柳 内三二 一尺四五寸 てんヲ捕フル置 水ニオボレテ死ヌ	野帳 2_11 (左ページ) 一 寸 八 分 二 寸 三 分 厚サ二 分 病氣ノ時 三寸七分 熊ノ皮ヲ付セルモノハ山ニ行ク時身ニツケ護神トス 六十八熊神ハ六寸五分 四寸五分
--	--

[illegible]

野帳 2_14 (左ページ)

ヤル 長クノ布ヲ抱イテ
 コソノ背ヲ用ヅル時ハ
 コレヲ負フ時ニハナ
 コレヲトシバ長クナル

オツスク (鬼) 頭 毛 皮
 ジャカラチス 毛皮
 タスクス マダゲス 棒
 ガスルゲス ホツプス

モフチュツク

ベテス

ポテントウ
 チヨゲス 布トウ

ウツトフオー (一尺二三寸)

ウ

襦皮製
 此下ニケツシ 水ゴケヲ入レテ
 巾ハ寸 巾三寸五分位

二尺五寸

ジャッカ (ギ) cradle

三寸

(右ページ)

木 棒 聖一寸二三分

子供 病氣ノ時
 皮 ヲ用ヅルヤマンガ作ル
 トラルング s

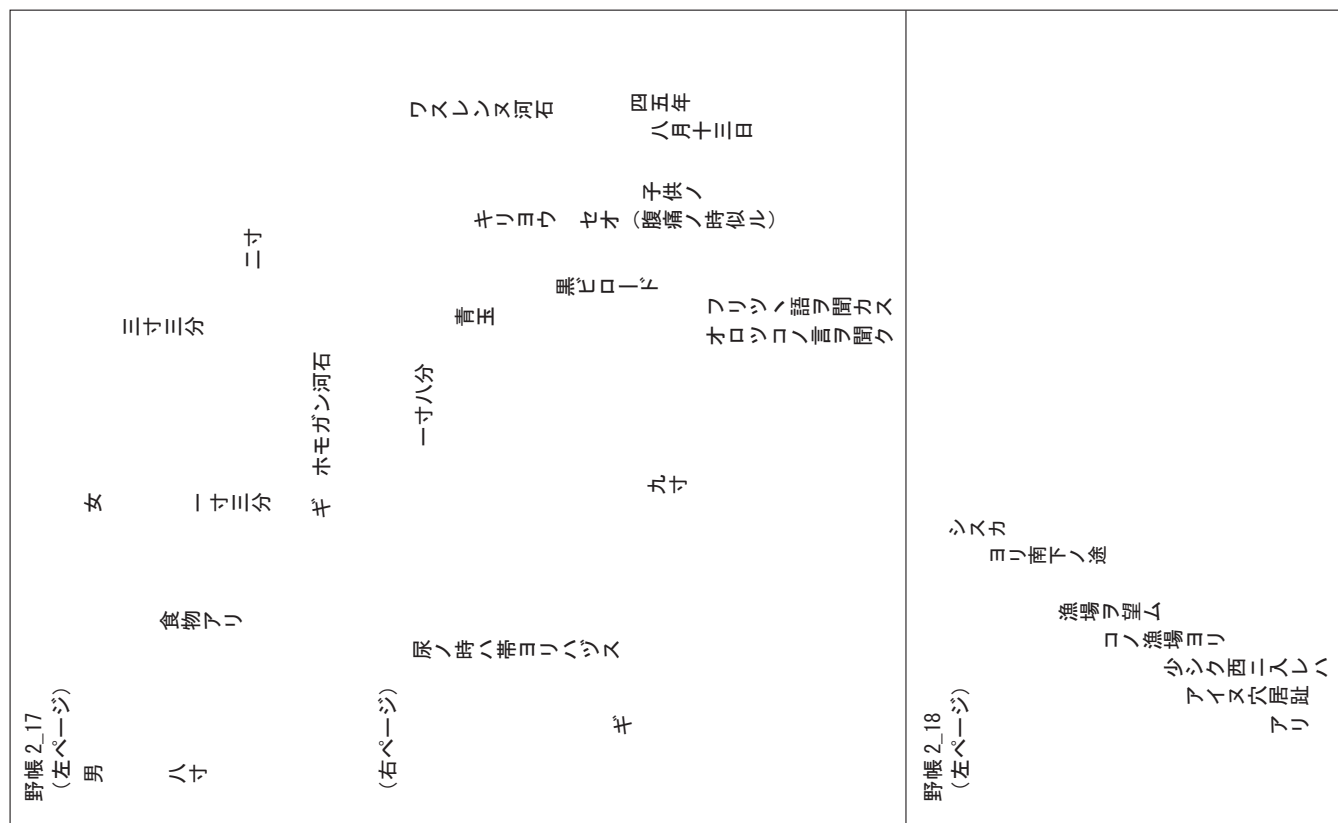
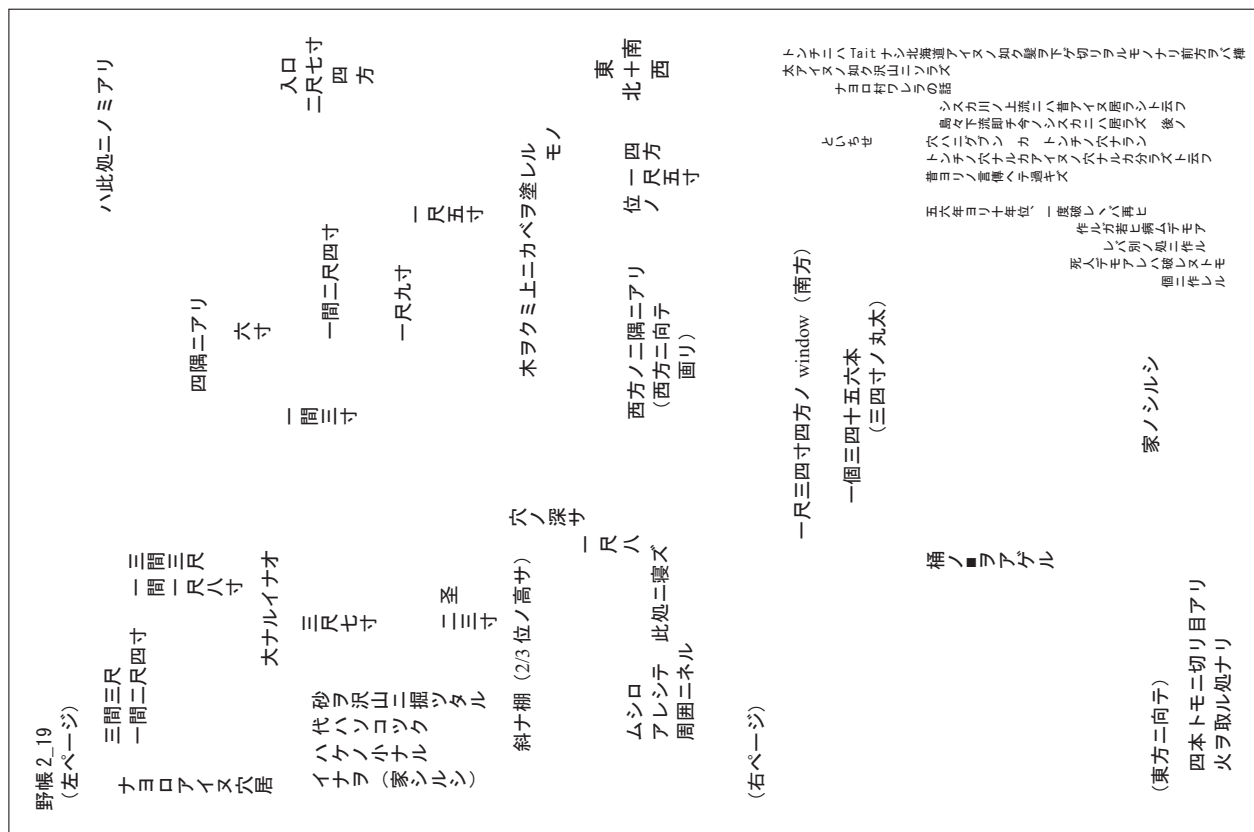
ケヅリカケツ 聖二寸位
 ナヲ ノ上ニカケル

男

ギリ

オロツコ
 子供 病氣ノ時
 父ノ作タレモノ三ヶ頭ニ下
 置き或ハ時々頭ヲナメル

実大

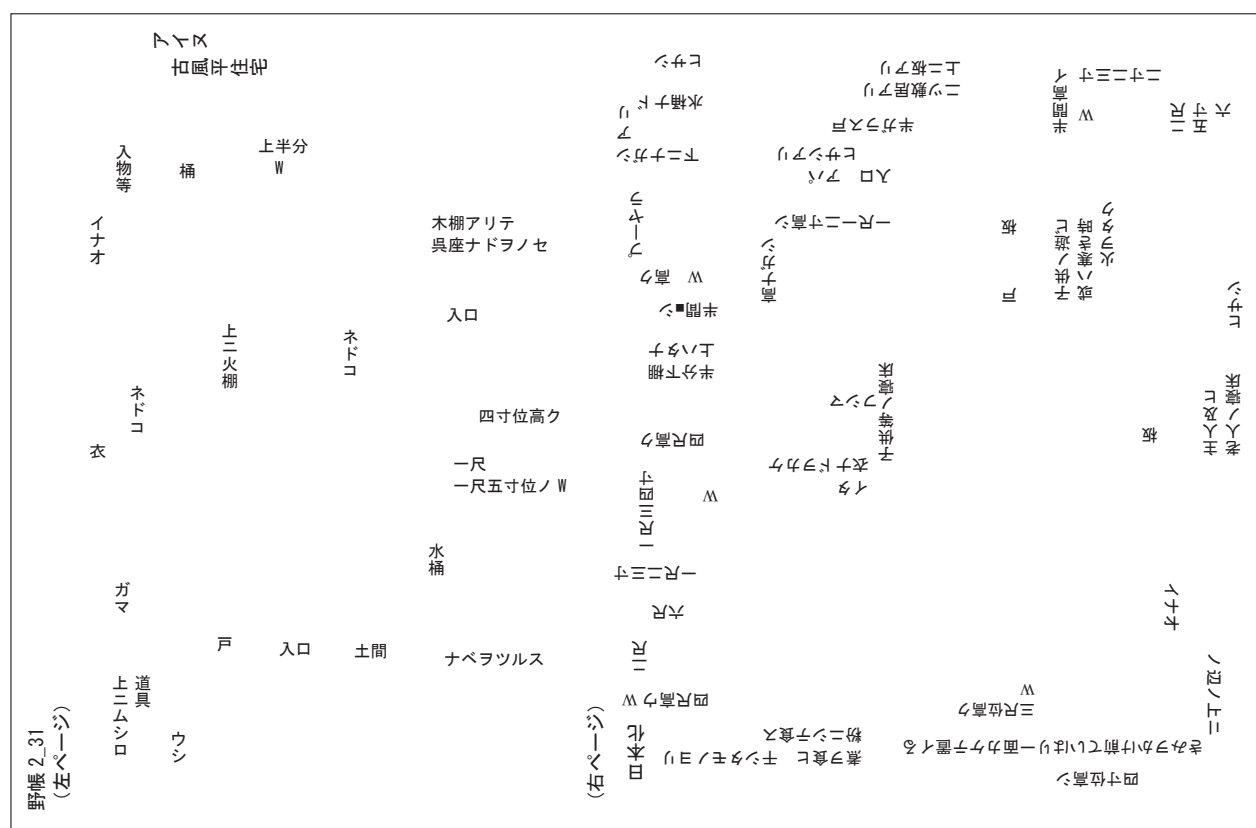
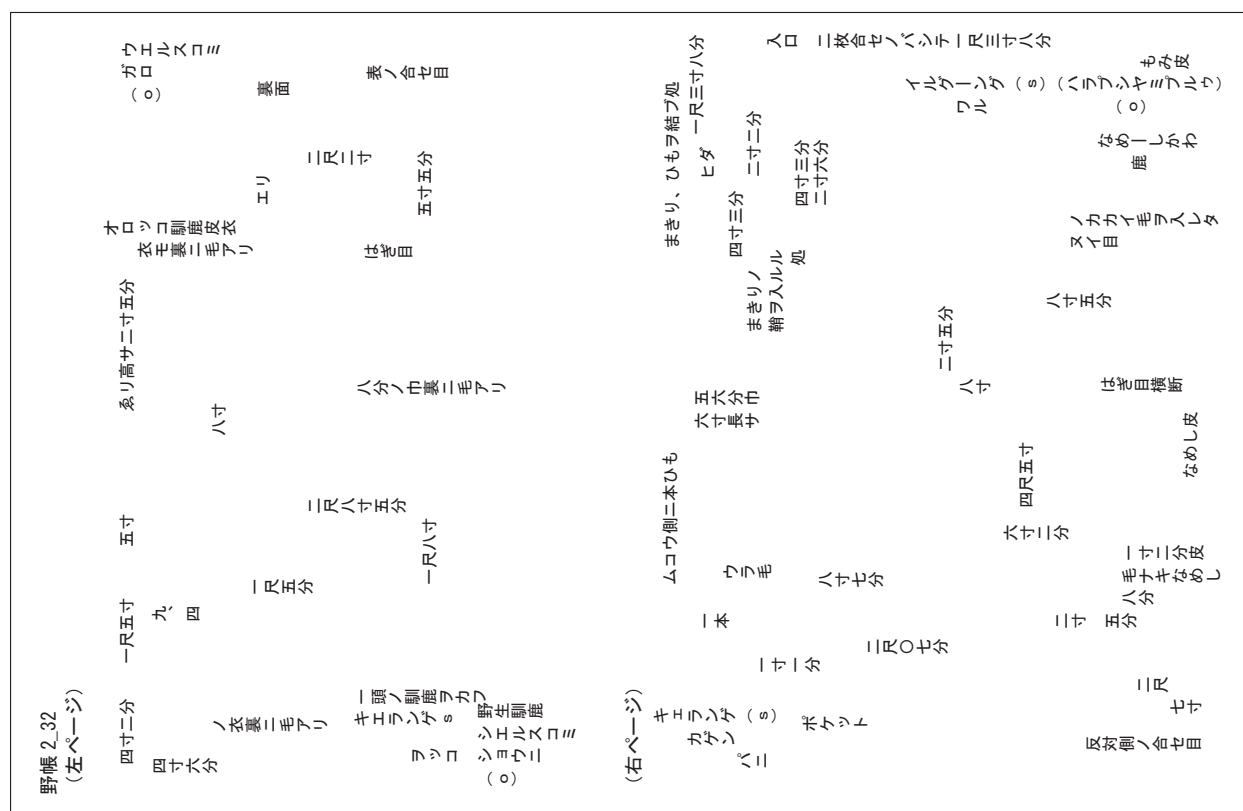


野帳 2_20 (左ページ) ウブニ 物置ナリ サクコタン 渡船場 北海連ノコロボククルハハサル方此島ノトンチトハ別ナリ トンチハアイヌヨリナリシカヤナランカ開カズ ノ村 夏王御馳走トシテ食ヒ諸々方々ニ持ツ行キテ食ヒ 油 かゝる川ニエマル所 屋敷其ノ近辺ニテ食スルナリ(マエトトク) かゝる川ニエマル所 屋敷其ノ近辺ニテ食スルナリ(マエトトク)	野帳 2_23 (左ページ) シラハカ古戦場 モト穴ノ深サ胸布マデ 今ハ一尺或ハ一尺五寸位 巾ハ今三尺位 シラハカ古戦場 輪ノナキモノ多寡ノ近クニアル ハ家ノ神 少ヒシヲ離シテ沢山アルハ 海ノ神ニテ魚ノ沢山 来ル様ニト願フ 太陽ニ捧ケタルモノハ 蕪落ノ年ナイ 様ニ願フモノ
野帳 2_20 (右ページ) シラハカ穴居跡 今ノ土人村ニテモ西南ニ アリテ川ノ左岸小高キ 処 西南方ニハ山ヲヒカヘ 極ナリ 暖カナル場所、葦 近シ 至五間深サ 五尺 数多シ 水油ヨリ 三百位 海岸ヨリ 二丁位 今ノ村ヨリ 五六丁 今日ノ土人ノ跡ナラズシテ 昔ノ住民ノモノナリ 昔ノ穴ハ深ク 今ノモノハ浅シ 此処ノ土人 土人ト一 巾ニ於テハ大魚ナミ 今日ノ穴ハ長方形 カマ 入口 岨 標右ヲコタント云ヘリ モスリ 嶋 必ズ土ヲカケ 革カ木材ヲカケ其上ニ 今ノアイヌ一屋ト等シク 巾四間トスレリ 奥行三間トス 熊ヲツナギタル 木一疋ニ一木 ナリ	野帳 2_23 (右ページ) シラハカ岨ヨリ北ヲ望ム ワレ チカホロ ケカス? アイヌ シラハカ岨 カシボ?

野帳 2_25 (左ページ)	九寸七分	ワシ (グセ)。	七寸	back	角アルセオ	ケレ	角アル化物 (アンバ) O	G	ミルク	木皮	四五、 ノ八月十三日	妻病氣ノ時	ワスレンヌ
野帳 2_26 (右ページ)	一尺五寸	(右ページ)	ツアラハル	一側ノミニアリ他ノ側ニハ	ニ尺三寸 (全長)	アウコヤ サミコ	ラク	ラクマカ アイヌ grave	丸皮ケニ尺ノ如ニ skull	地表ヨリ四寸ニシテ入物ノ蓋ハ出	見ヲ取り去リ少シク土ヲカケサラ	ヒトヘ足ノ奥ハ出ツ	腰ニ帯 頭ニ珠 籠ハ手ノ 近辺
野帳 2_27 (左ページ)	三寸四分	天井上ニハ	物置	煙突ハ煙根ニ	通ス	ナガシ	桶	カマド	煙突アリテ家屋ニ通ス	六間	戸	ノ	産

野帳 2_24 (左ページ)	丸太	上ノ方ニ棚ヲカケ	天井上ニハ	物置	煙突ハ煙根ニ	通ス	ナガシ	桶	カマド	煙突アリテ家屋ニ通ス	六間	戸	ノ	産
野帳 2_24 (右ページ)	丸太	上ノ方ニ棚ヲカケ	天井上ニハ	物置	煙突ハ煙根ニ	通ス	ナガシ	桶	カマド	煙突アリテ家屋ニ通ス	六間	戸	ノ	産

[illegible]





野帳 2_37 (右ページ)	未熟ハ方ハ渋白、皮赤ニナル シヨークトヤトツ (0) バーラウグ s エスクト (g)	ルウツトウ (0) チャハルガ s ウスキー (g)	ちるをかせ	黒 ^{くろ} ぶ ^ぶ と ^と う ^う ノ ^ノ 如 ^{ごと} ク 白粉 酸味アリ	ドウシエクタ (0) チャーノ (g)	地衣 ラウイクタ (0) ガノワハ (g)	コホツヨ (0) s ルゲ s ラントウ (g)	カホー (0) ガツコフ (g)	甘味アリ
野帳 2_38 (左ページ)	A	B	B 秋ころ麥移セリ (D)	B 古■ひつ	(E)				

野帳 2_35 (左ページ)	G	外	内	ニシン時季ノ アイヌ家五ツ 四ハ眞 一ハ丸太 庫ハ五ツ (ニシンアリ) 物置ムシルアリ	ホヌツプ旧アイヌ部落 大正六年九月訪問ノ時ハ アイヌ家庫一室トナリ 傍ラニニ広大ナル漁場出来 数年前ノ観ニ興ニナシ	イカマツカ (アイヌ帽) 撮影セル分 (豊原博物館ニ于)	深黄糸 白地糸 白糸 黒糸 赤地 無色 白 赤 紺地	長五寸 巾一寸二分	赤 白 赤 白 赤 白 赤 白
野帳 2_36 (左ページ)	G	昭和十四年七月渡樺中	(右ページ)						

(右ページ)

トウクス (熊をこなぐ)

イヌイイナヲ アザミシ
頭骨(二ノ)ナヘル
他骨は(二)ツツ(二)

サスン
イナヲ
ノ神ヲ処示ル詩
九月十二日

ヲキ

はヅク

トウクス (熊ヲツナグ)

イヌイイナヲ

ウ家ノ側乃と
火ノ神(一年で
九月、一月)
二度灰ヲ
カヘル

(A)

トウクス (熊ヲツナグ)

イヌイイナヲ

ウ家ノ側乃と
火ノ神(一年で
九月、一月)
二度灰ヲ
カヘル

(B)

リーイナヲ (太陽ニ)

大病ノ時ノミ

ソーパーウス
イナヲ
(家ヨリキタルモノ)

古クナレハ他ツタモ
出ケ臺
シヌヲツパ
イナヲ
毎年四月二

(C)

家ノ神(家ノシルゴ)

チエフカトイナヲ

家ノ神(家ノシルゴ)

(E)

チセソエスイナオ
山ノ神ニ

野帳 2.39
(右ページ)

チャエニサベィ トナカイ 2オニシテ子ヲ生ム、
旧七月中頃ヨリ毛ハトレル 世後2ヶ月

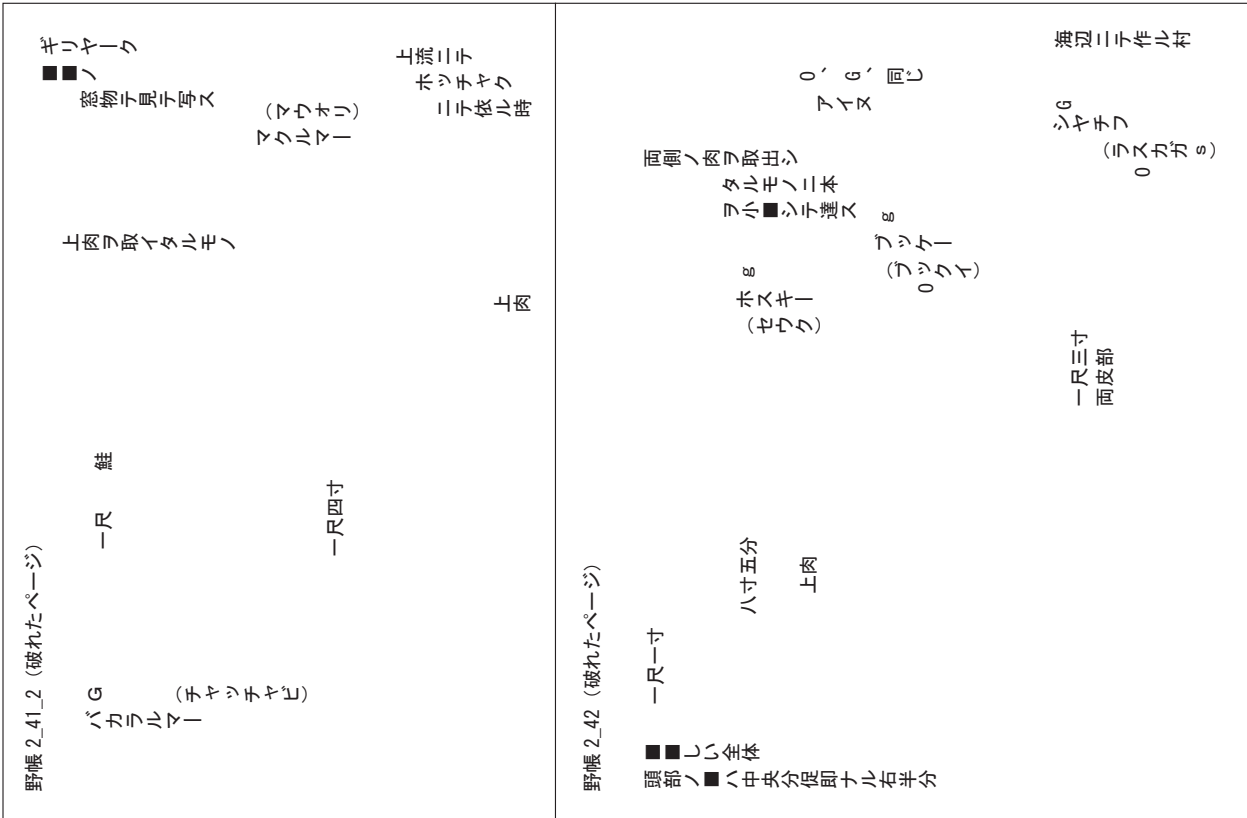
カタッパベ
アウリ" ベィンチェベ

落ツル 雌ノモノナハ 翌年子ヲ持つ時
落ツル

雌ノ角ノ毛ハ (ニケ) (ニヶ月) 八月ニナレハトレル
雄ハ二足アレハ角ニテ争セ孔コトアリ足
■ ■ ■ 故ニ一足アレハマシ 八月 ■ 度 ■ スル
子ハ一年ニテ多頭ミル

ハケ月ニテ子ヲ産ム
角ニ孔アリ ■ ■ ■ 面シフセグナトナリ
双子ノコトモアリ、
雷ハ降ツツモ雪ヲカギ分ケ谷地ノ草ヲ食フ、夏ニハ女郎ナル草ヲ食ス、
雪中ノ人ノ尿ヲ食ス、わらヲも少し喰フ、

シャーマン 初メ腰ヲフリ太鼓ヲ打ツ、煙ノ周囲マハルコト回ニテ立ツテ唱フ太鼓
ヲ打ツツハ時々豊採ナ声ヲ出ス ■ ■ ■ 神楽 ■ ■ ■ 一定時ニテ腰ノガゼやくを トクト ■ ■ ■
アグるヲカスキク唱へ ぬ面 ■ ■ ■ 立ツテ 繰リ返し サケブ ミフルイスル
形着出来ズ、最後ニハ汗ニテ全身ヌレ太鼓ヲ ナゲテ ■ ■ ■ シ メーモクスル
鳴ベシ ■ ■ ■ 言葉ノ中ニ病氣ノ原因 ■ ■ ■ 他 療私 ■ ■ ■ 云フ
シャーマンハ ■ ■ ■ 他人ニハスハスアラズ 一人ヲ ■ ■ ■ 賞ユル 女郎ナル
シャーマンハ病人等 ■ ■ ■ ニモ ■ ■ ■ 滞在シテ占フ ■ ■ ■ 唱法中ニ duil ノ ■ ■ ■ ルカラ
云フガ ■ ■ ■ 言ツツ ■ ■ ■ 強ナラズ故ニ解スナル人モアリ セグニ人モアリ duil ■ ■ ■ ル
ノヲ見テクラ指示ス 病来ノ男子ハ作ル 病ハ治スレハ ■ ■ ■ ラ沢山取ル



関連する写真資料

野帳2に関連する資料として、石田が撮影した古写真を掲載する（所蔵：公益財団法人アイヌ民族文化財団）。90043については小西（2012）を参照した。

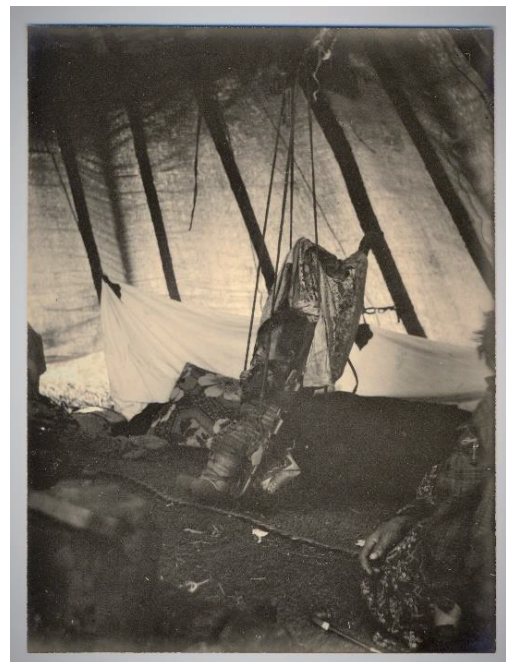
- ・ 90022 1909 年撮影。野帳 2_9 に描かれた像 2 体。
- ・ 90043 1907 か 1909 年、タライカ湖周辺にて撮影。左は石田収蔵、右がニヴフの案内人のボーコン氏か。ボーコン氏の夏の家は野帳 2_34。
- ・ 90101 1912 年ナヨロにて撮影。野帳 2_19 のアイヌのトイチセ（冬の家）の内部。
- ・ 90187 撮影年、場所不明。野帳 2_14 に描かれたゆりかごに類似。



90022



90043



90187



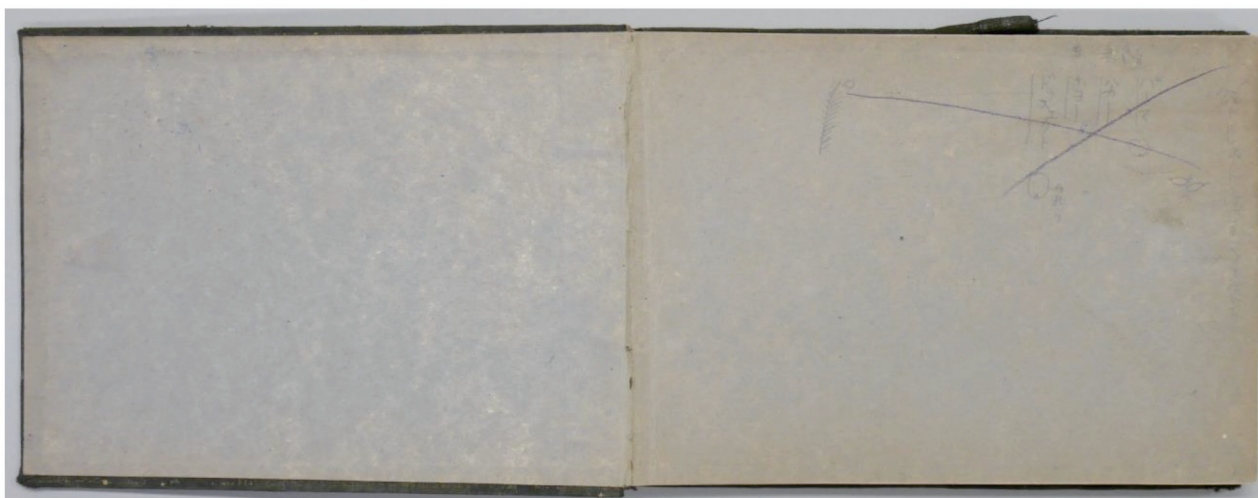
90101

野帳 2 の資料画像

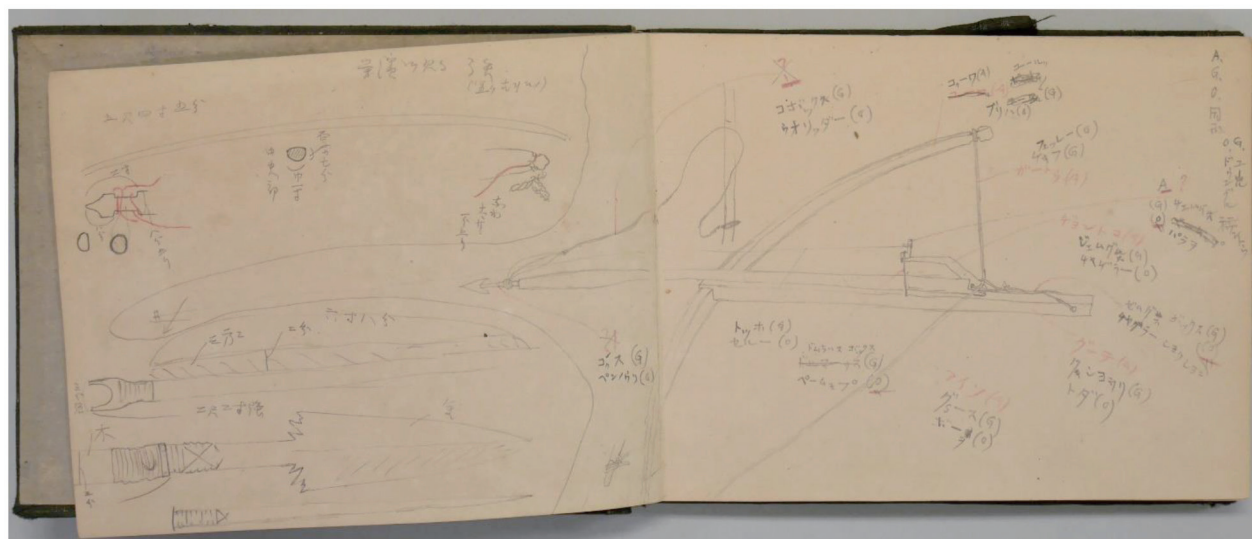
野帳 2_表紙



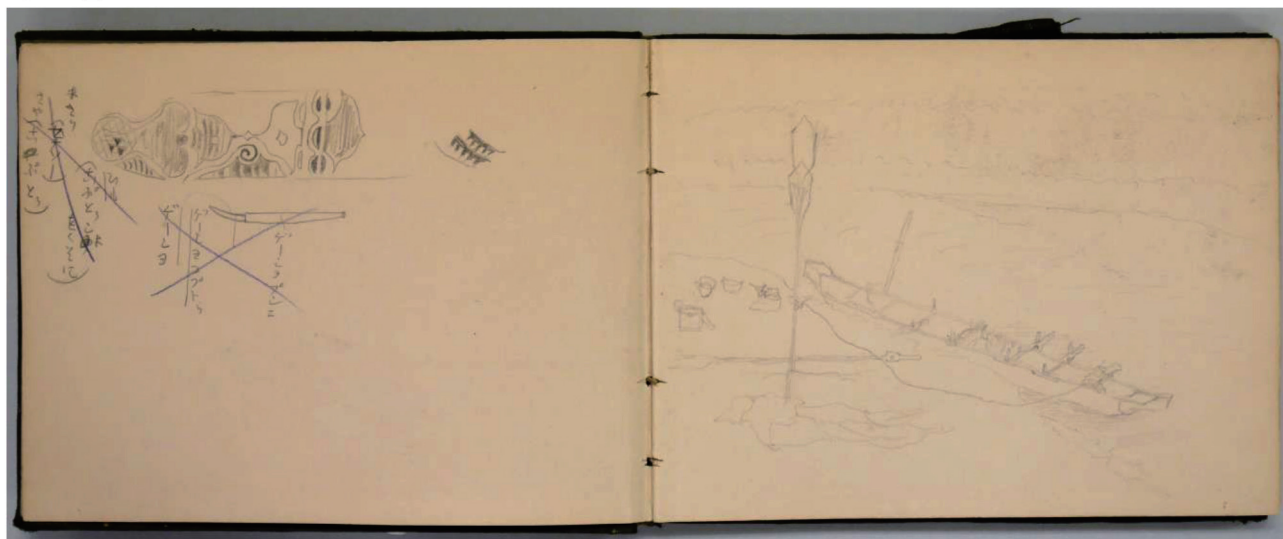
野帳 2_1



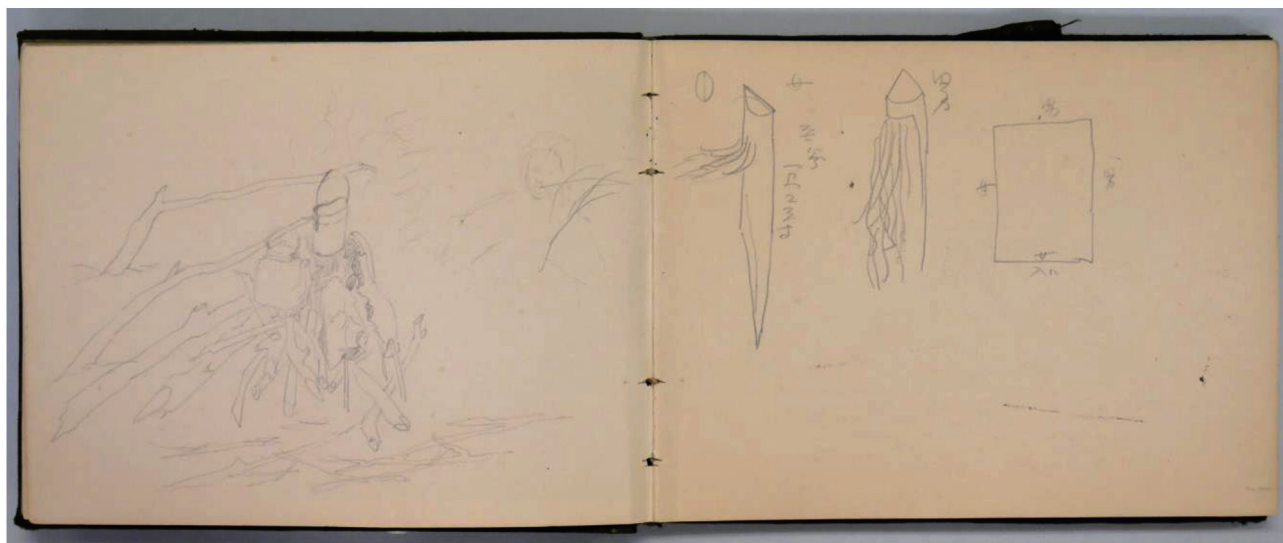
野帳 2_2



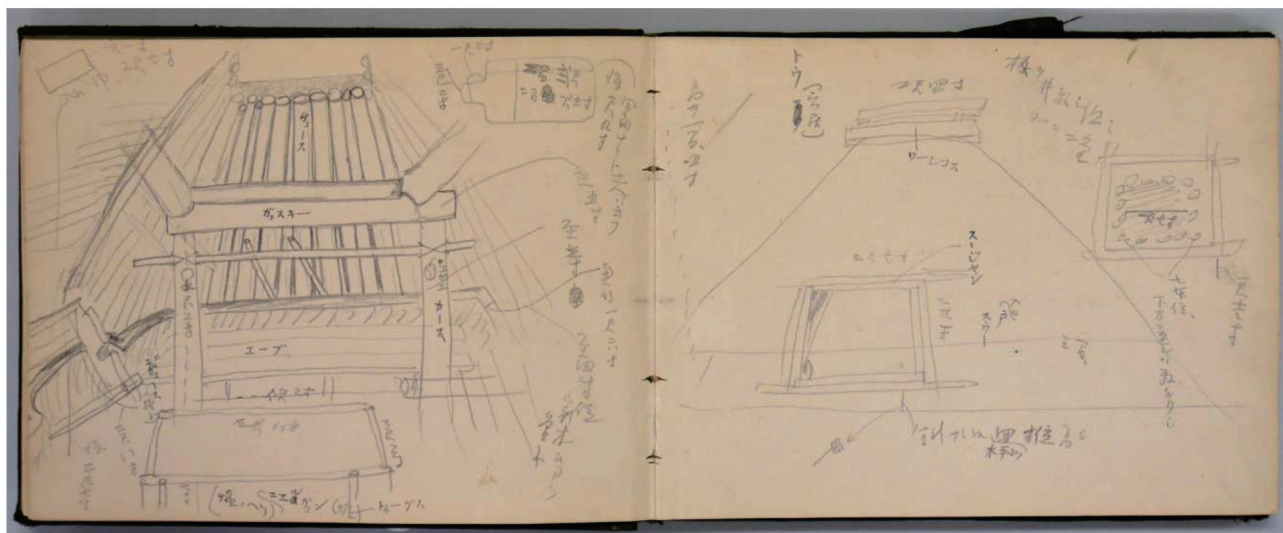
野帳 2_3



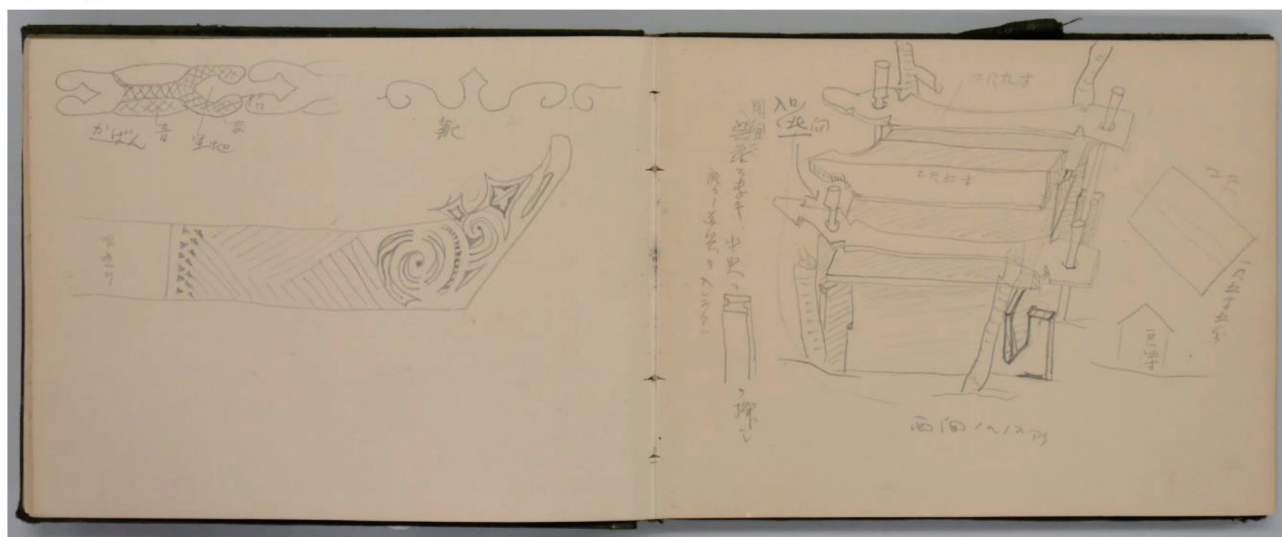
野帳 2_4



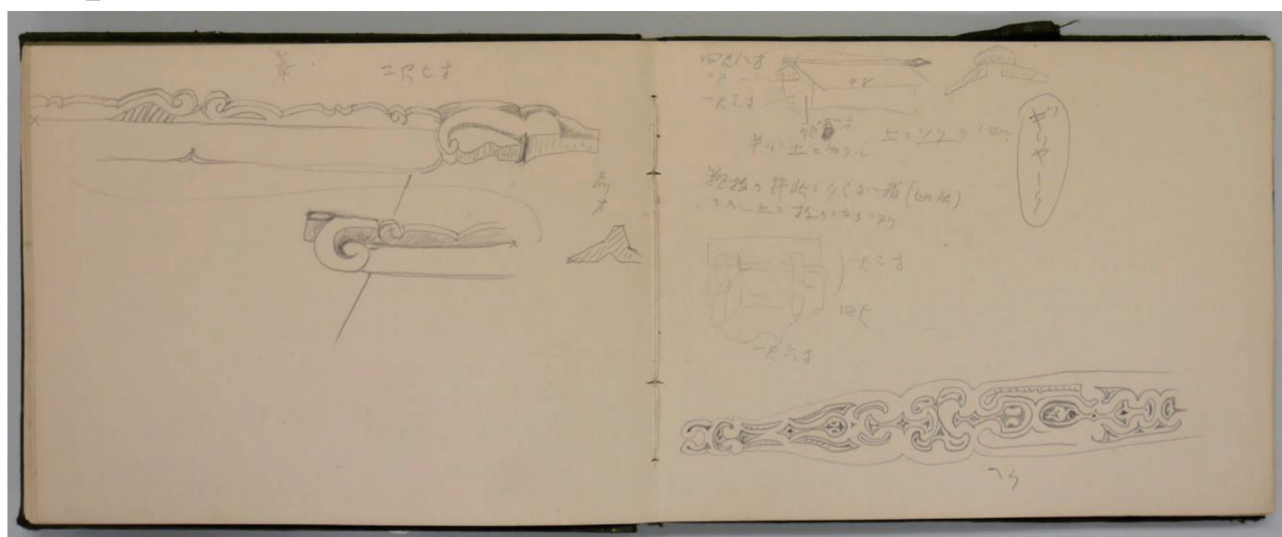
野帳 2_5



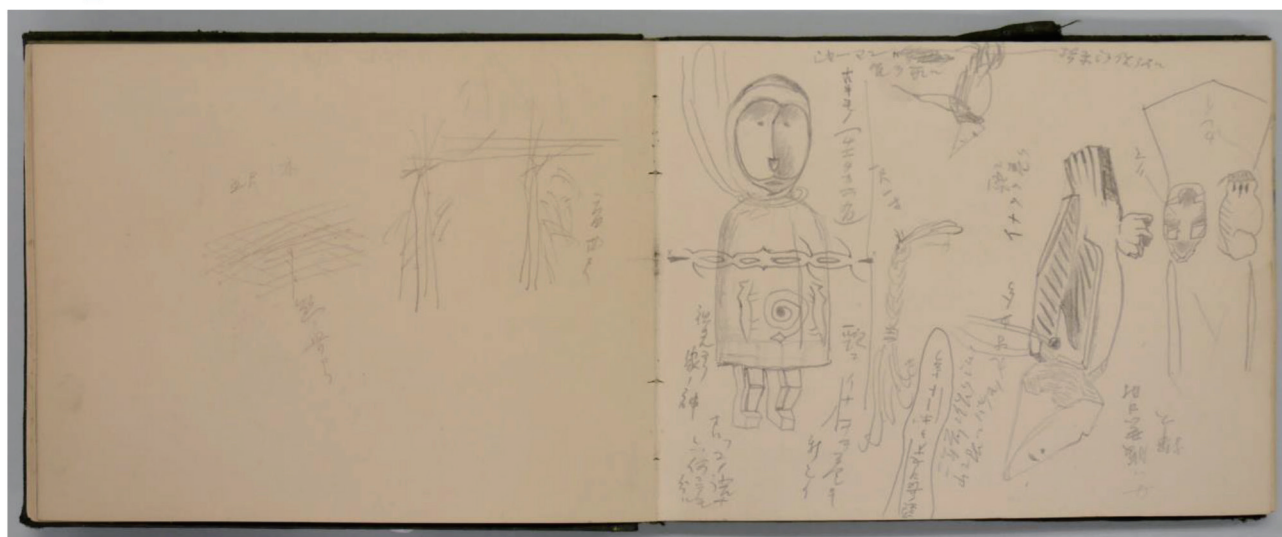
野帳 2_6



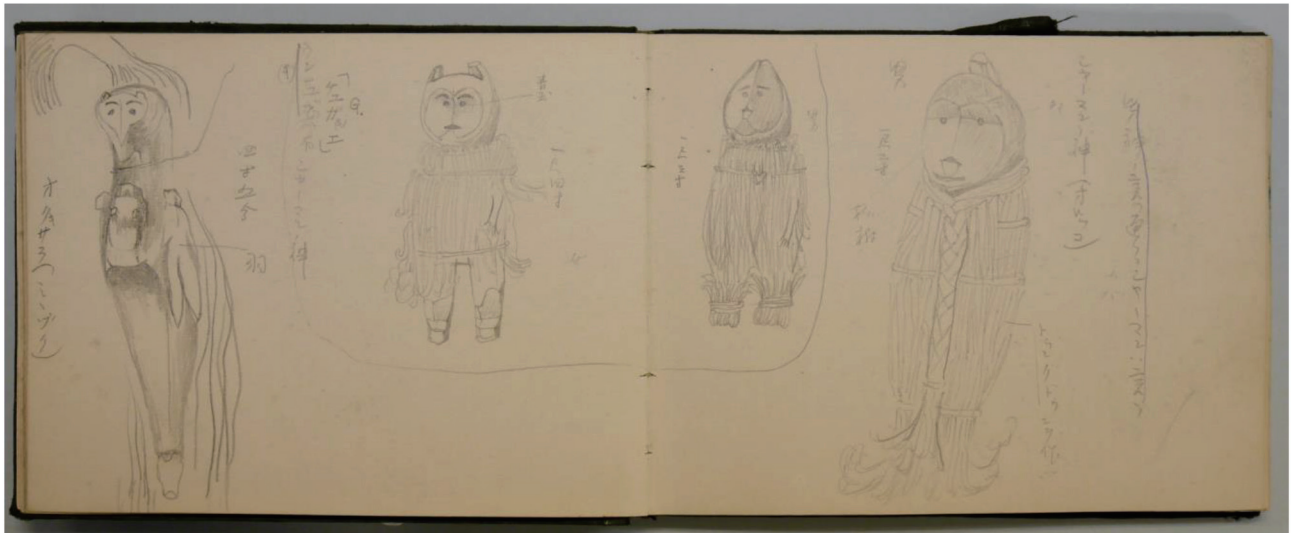
野帳 2_7



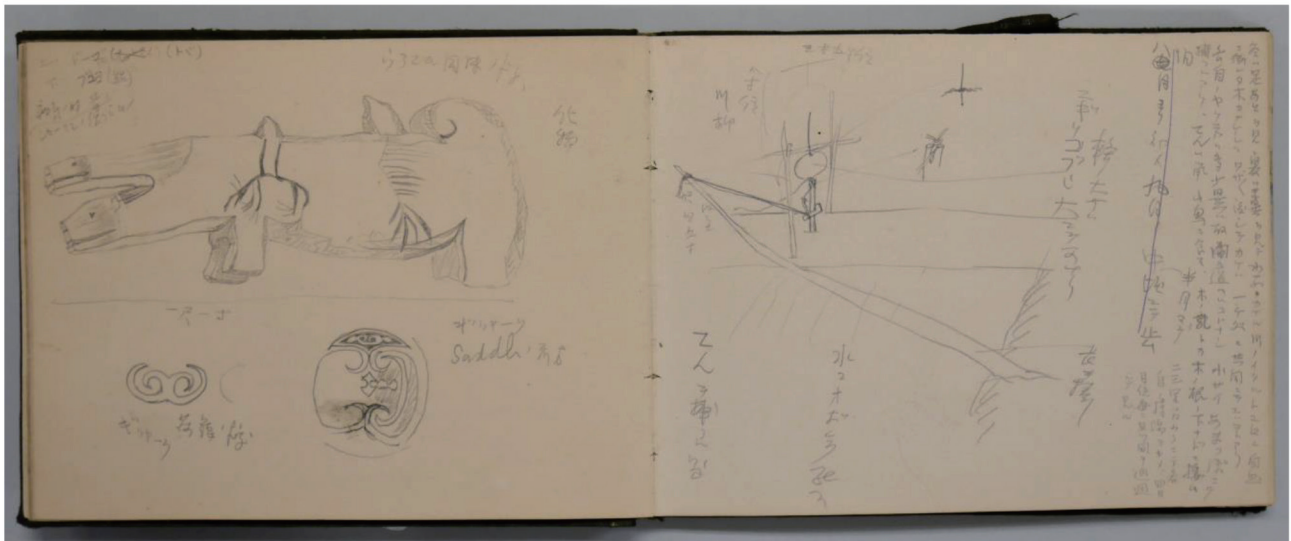
野帳 2_8



野帳 2_9



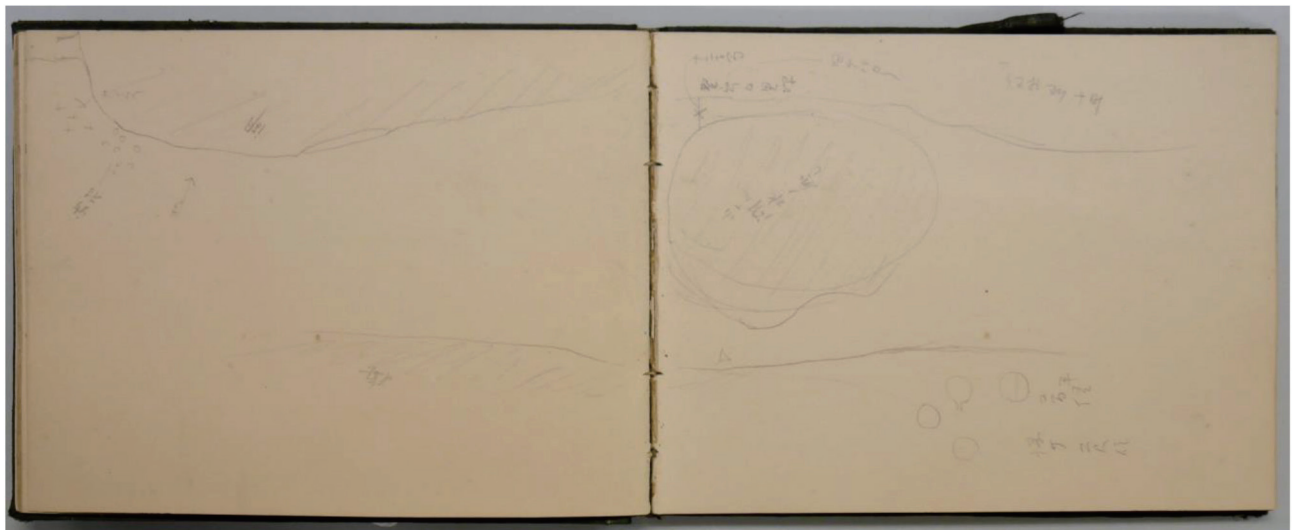
野帳 2_10



野帳 2_11



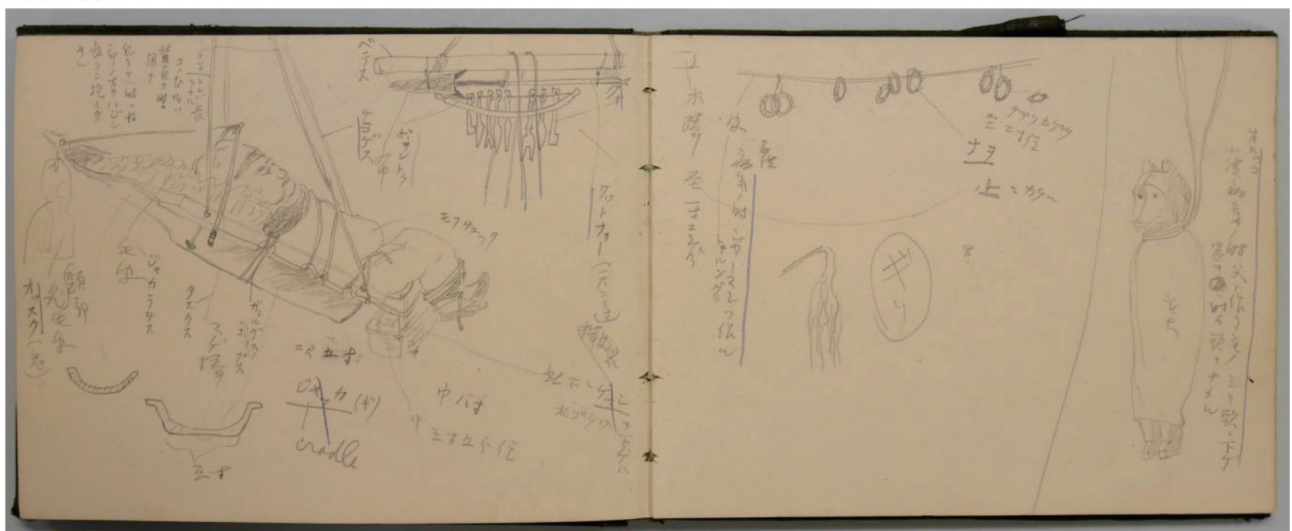
野帳 2_12



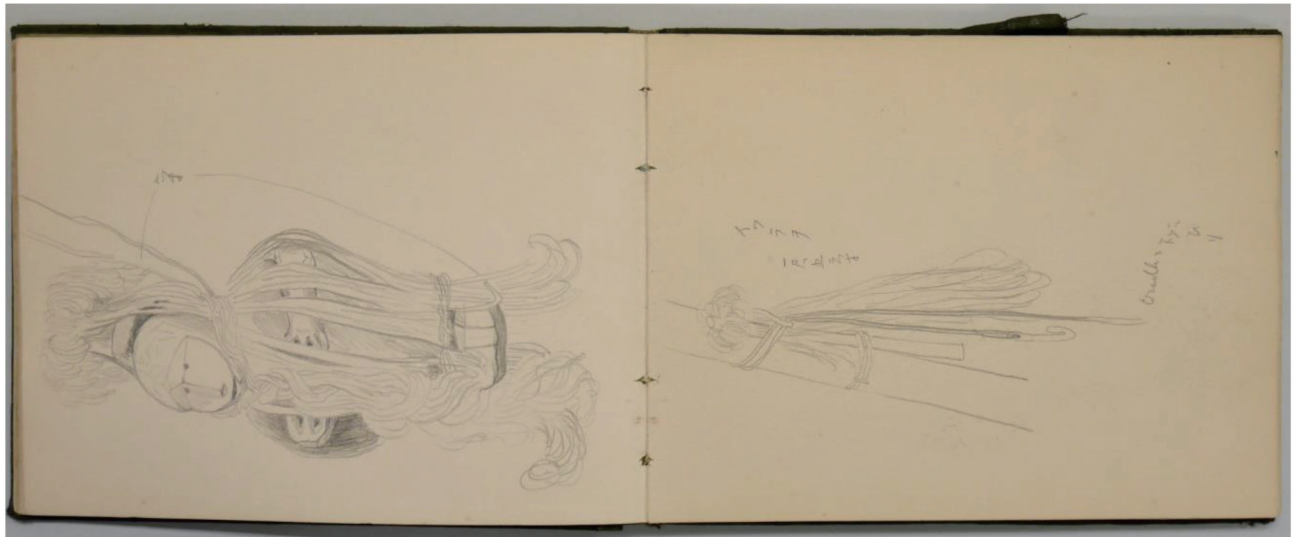
野帳 2_13



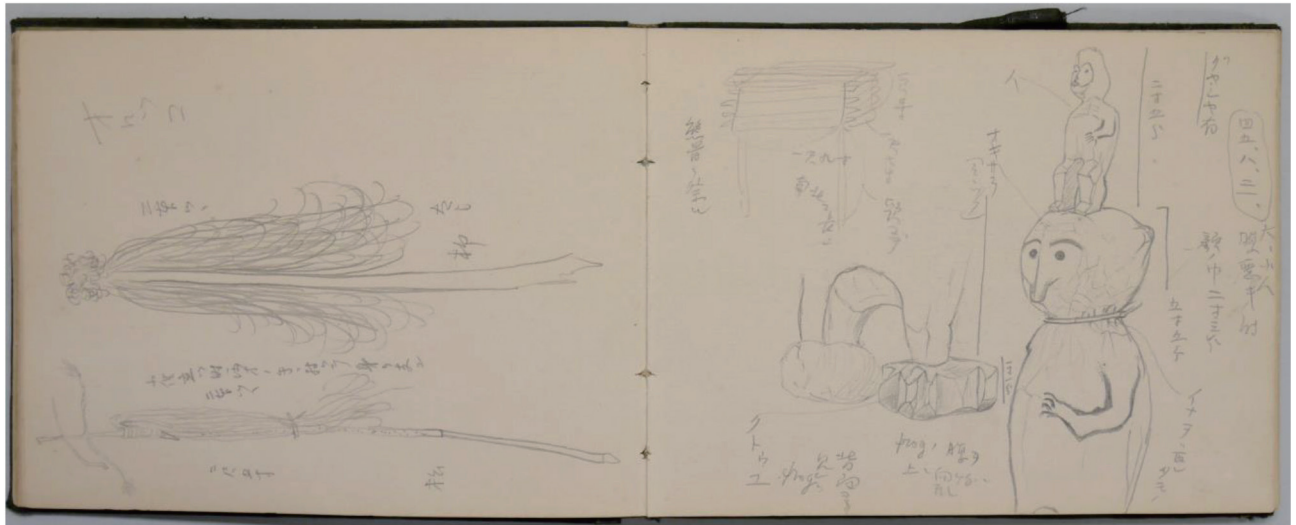
野帳 2_14



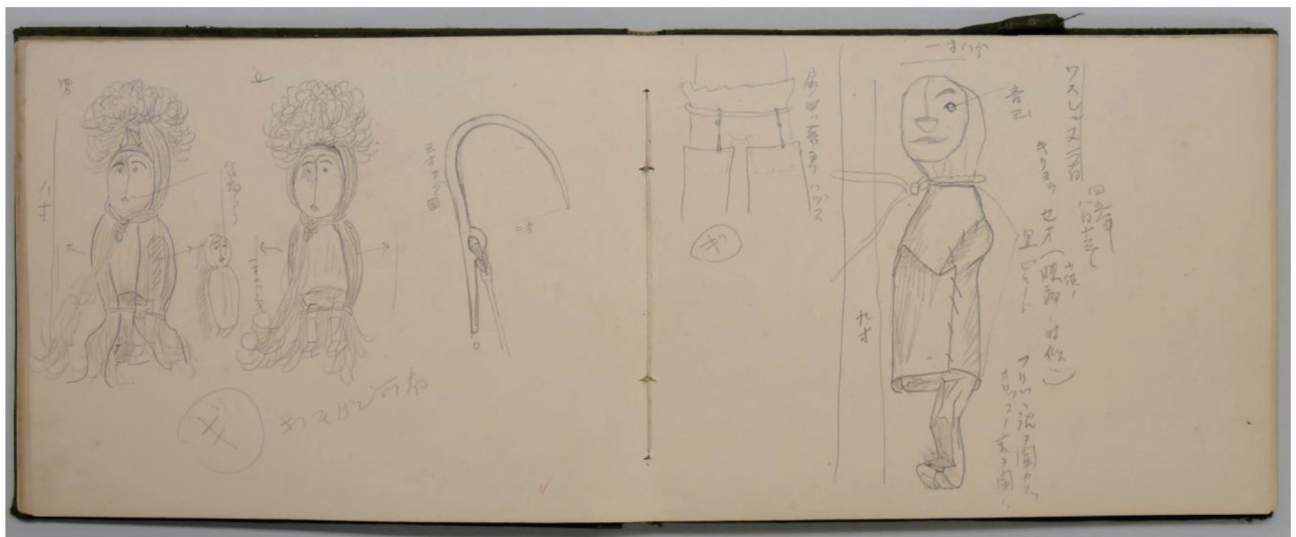
野帳 2_15



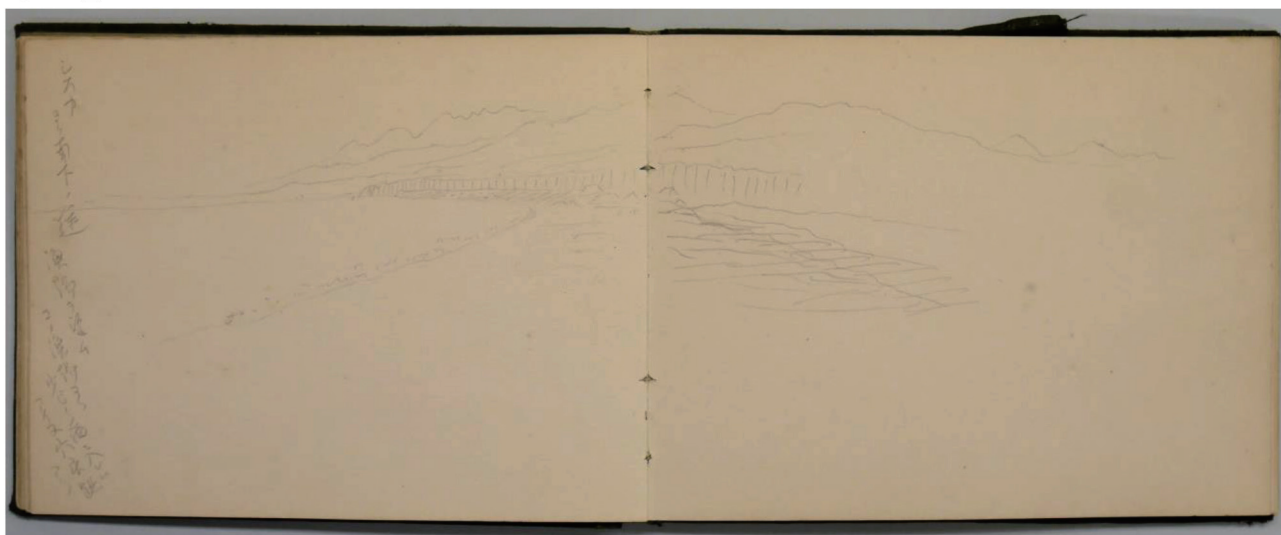
野帳 2_16



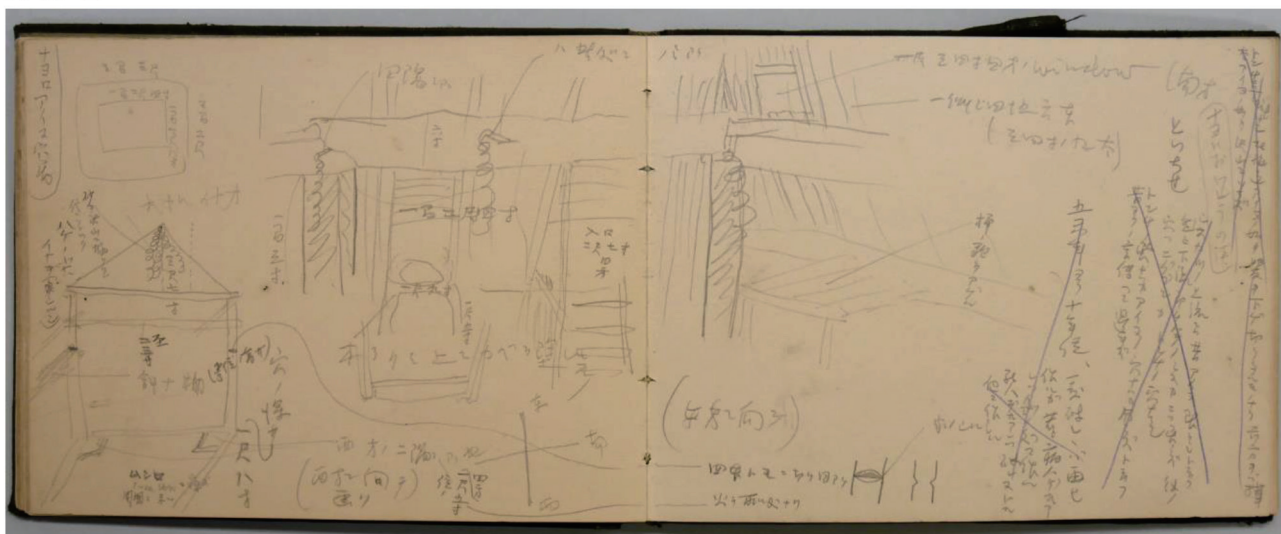
野帳 2_17



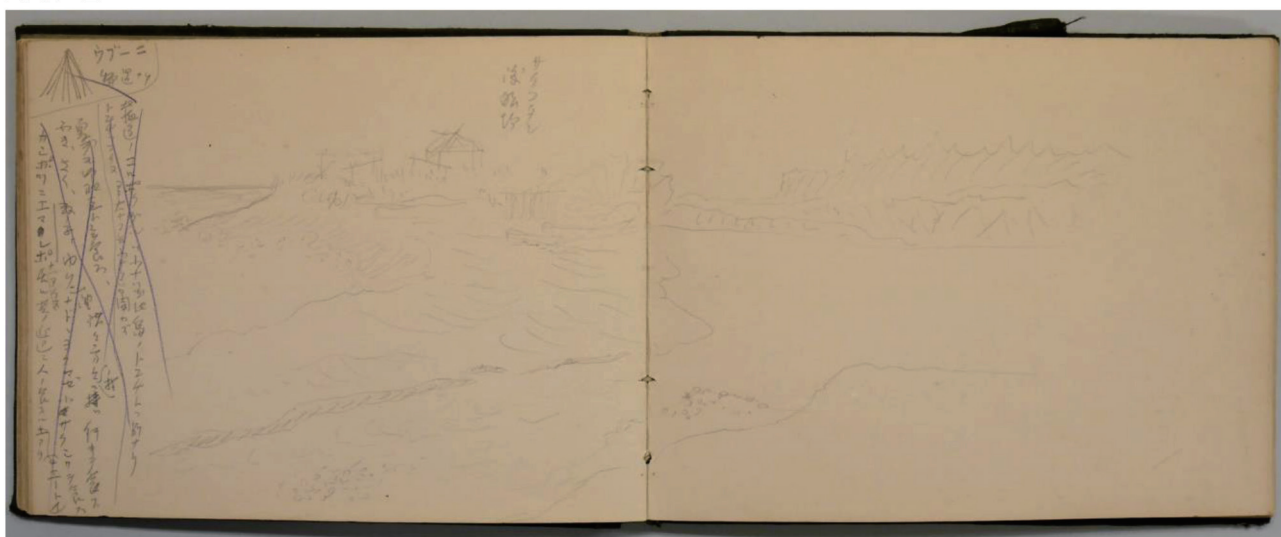
野帳 2_18



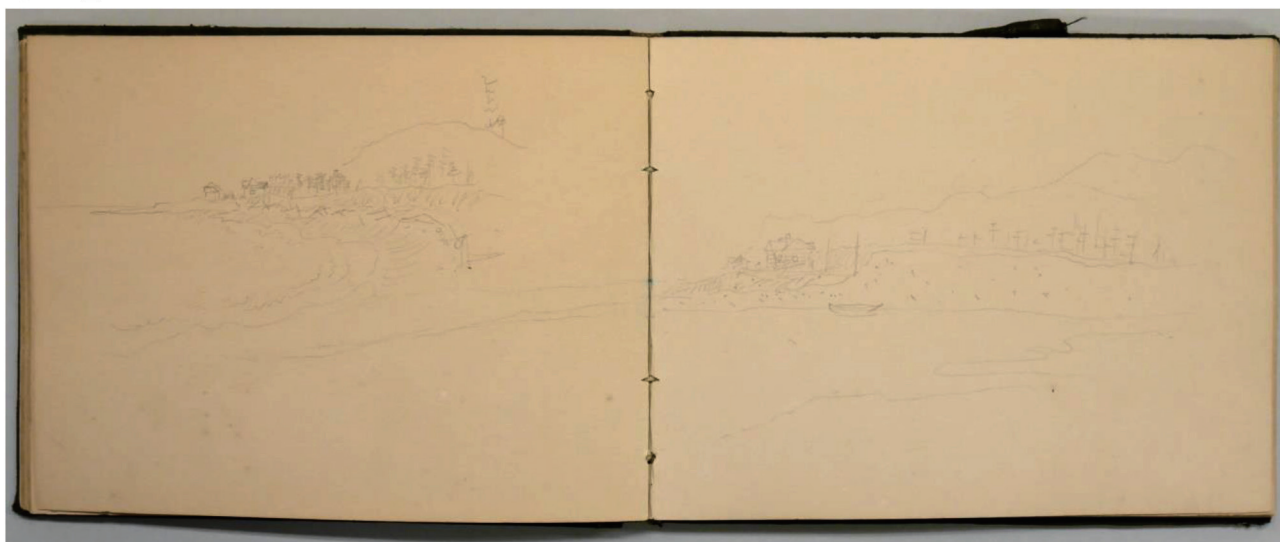
野帳 2_19



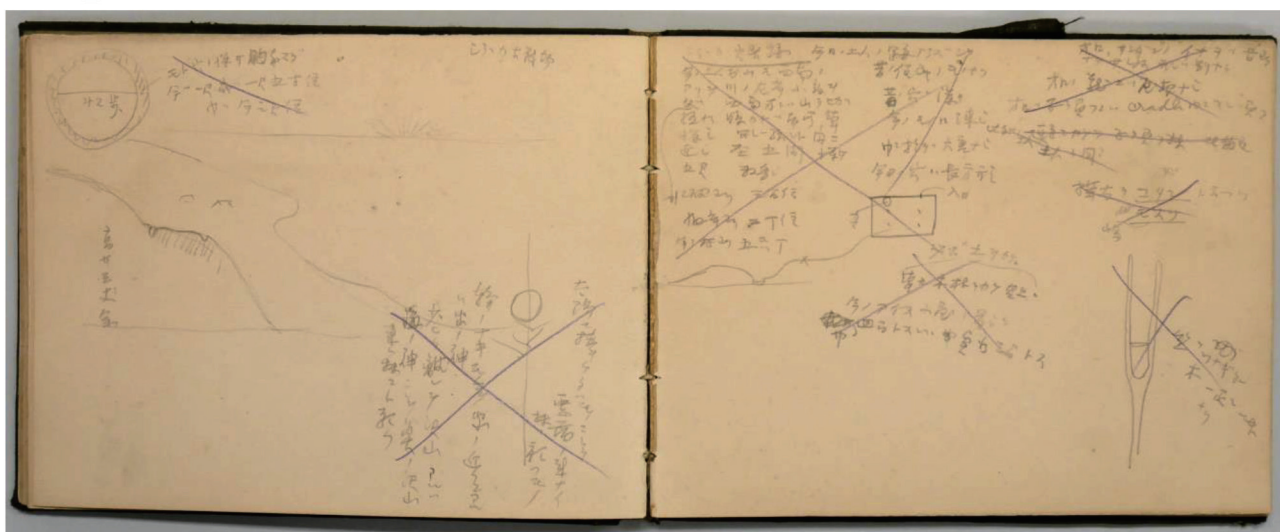
野帳 2_20



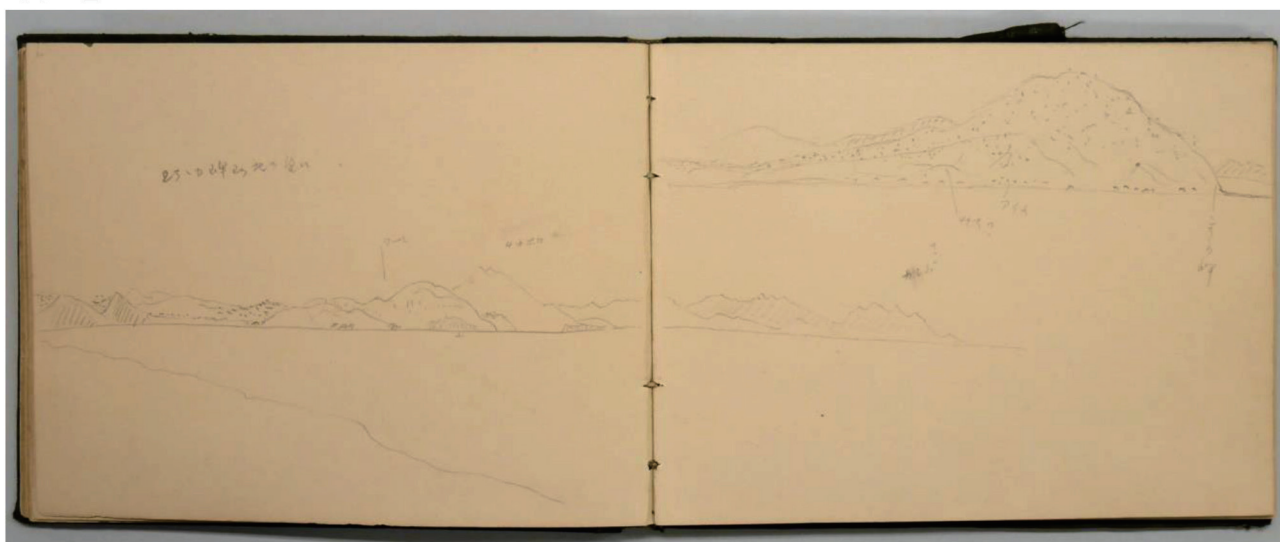
野帳 2_21



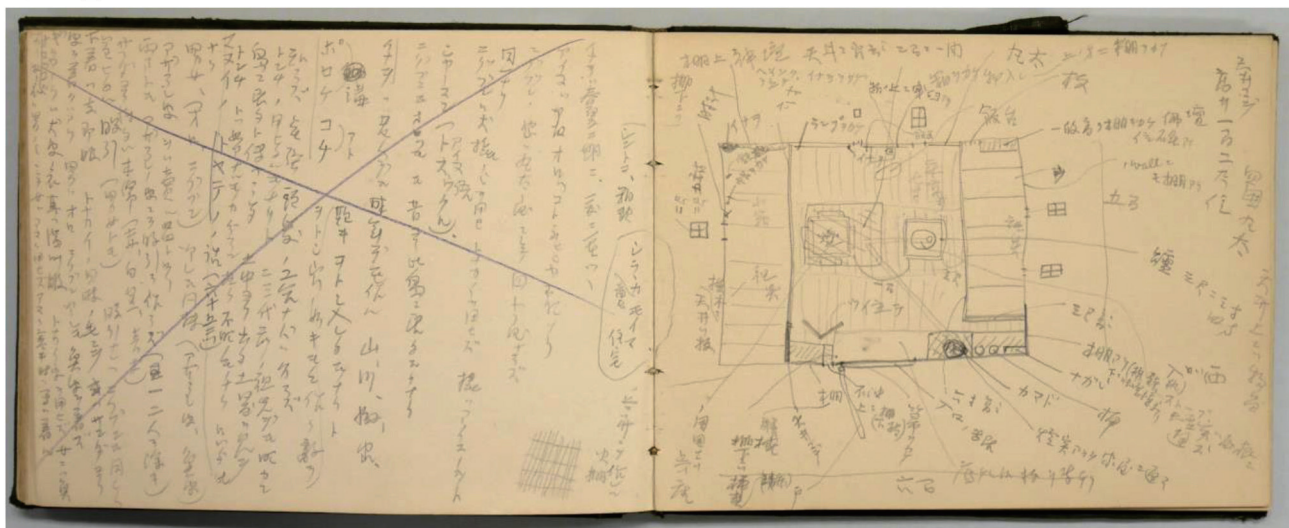
野帳 2_22



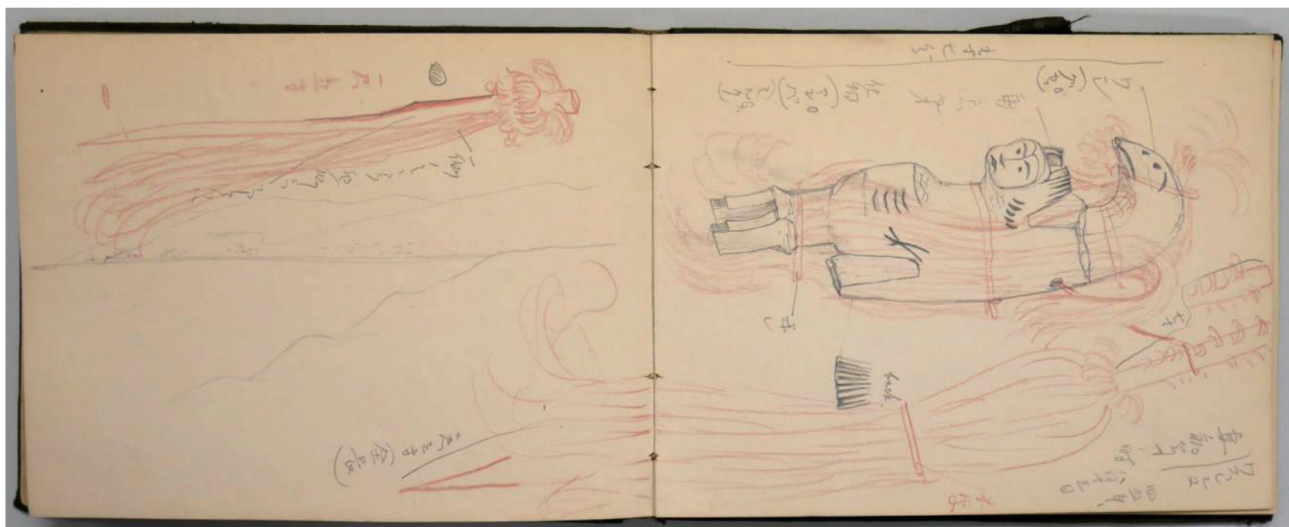
野帳 2_23



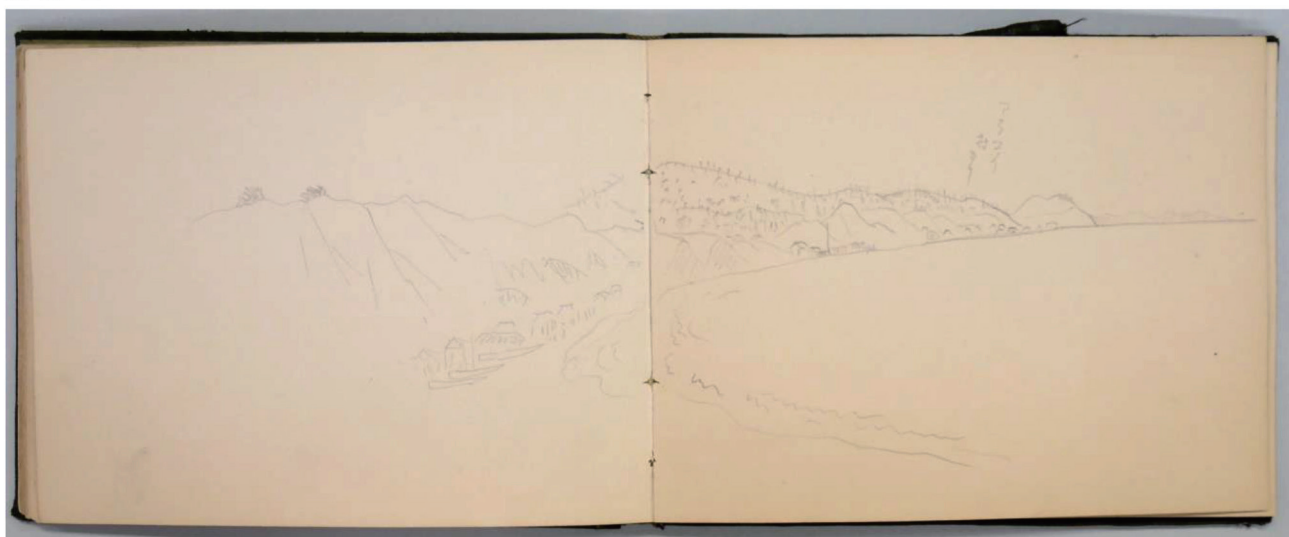
野帳 2_24



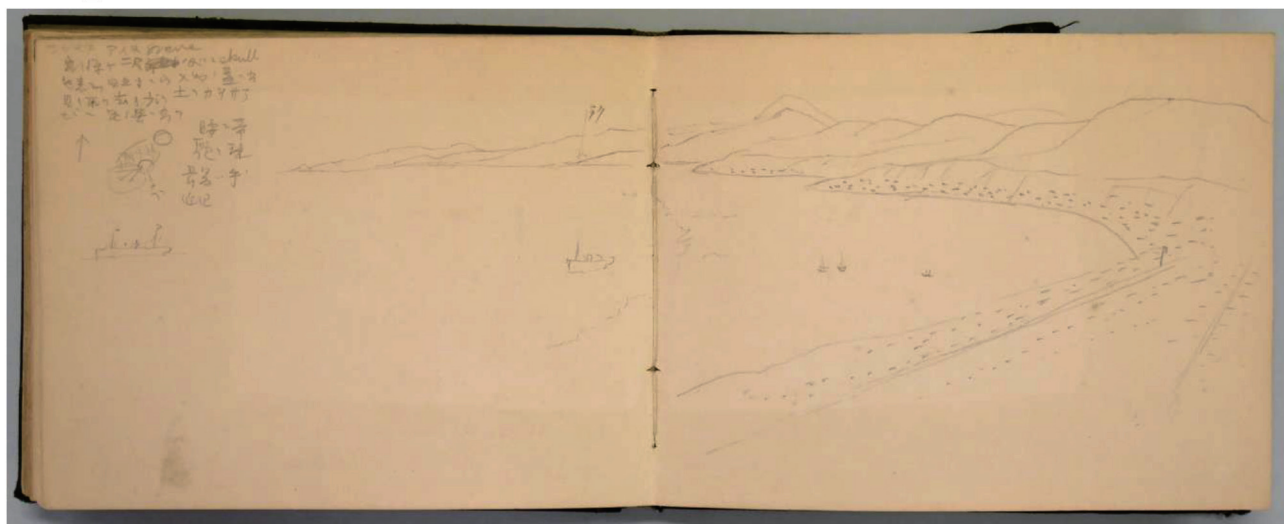
野帳 2_25



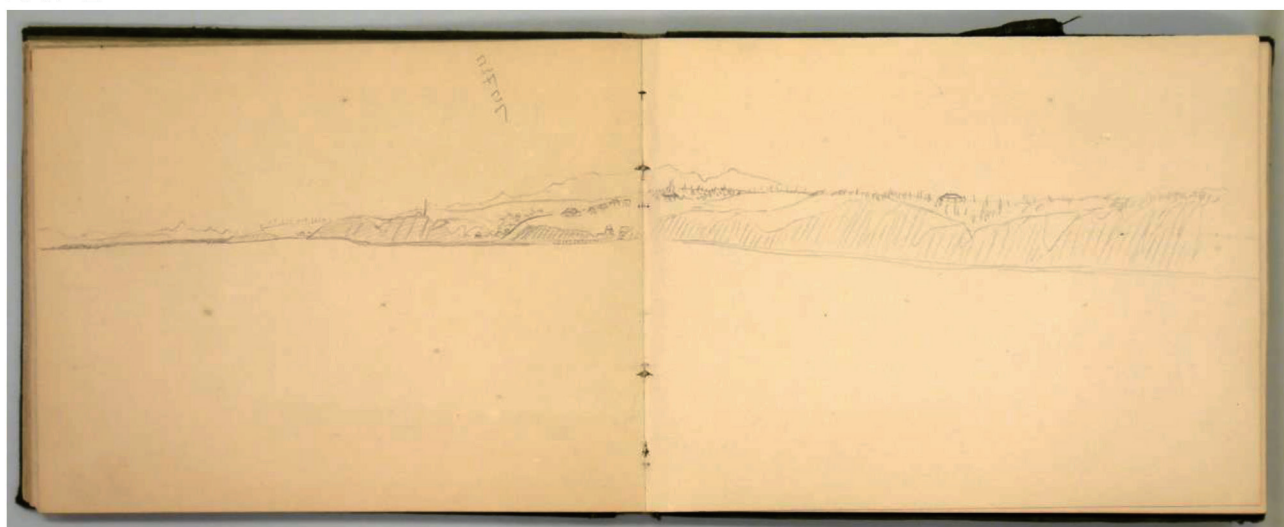
野帳 2_26



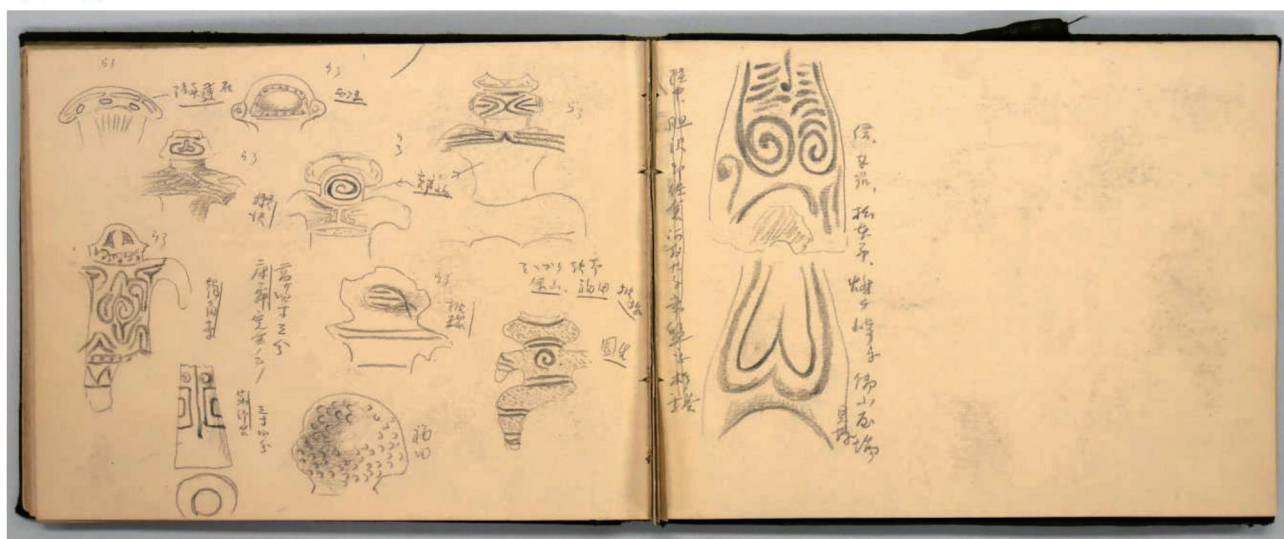
野帳 2_27



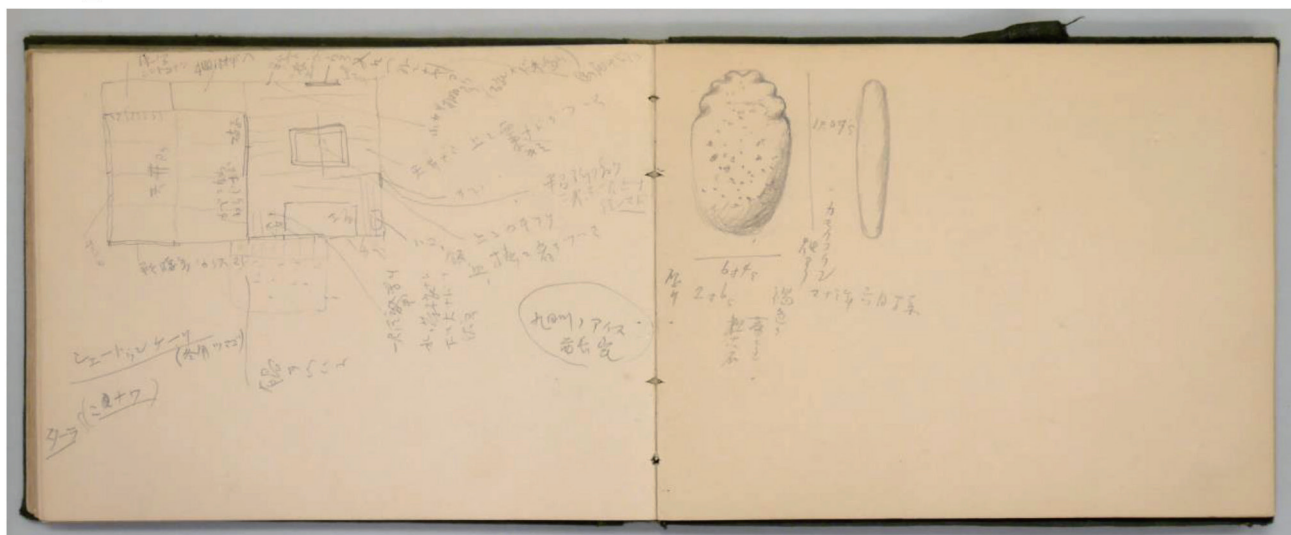
野帳 2_28



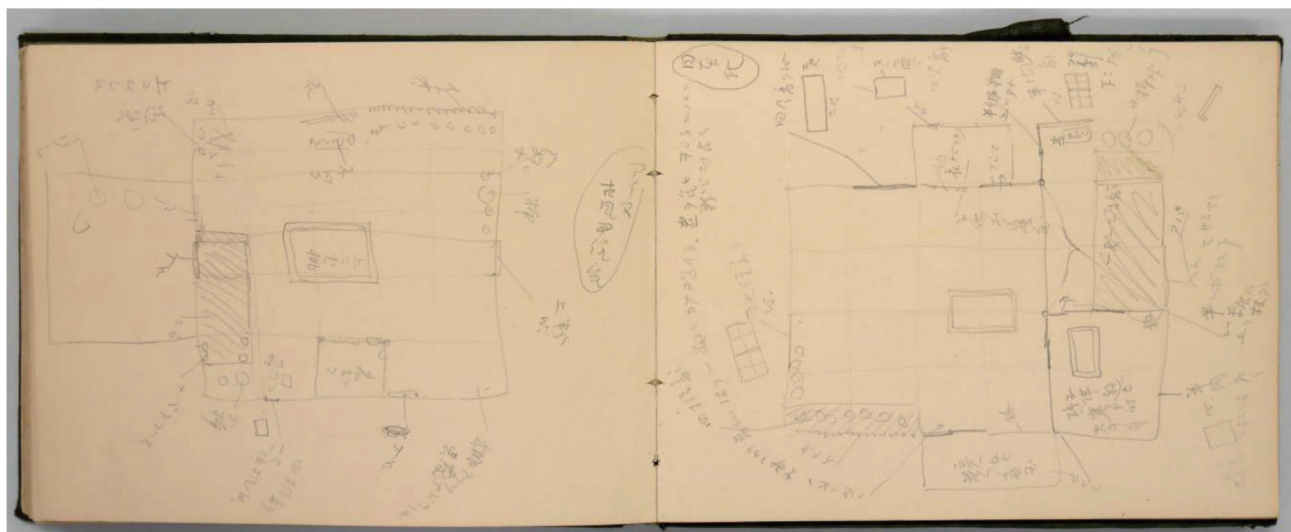
野帳 2_29



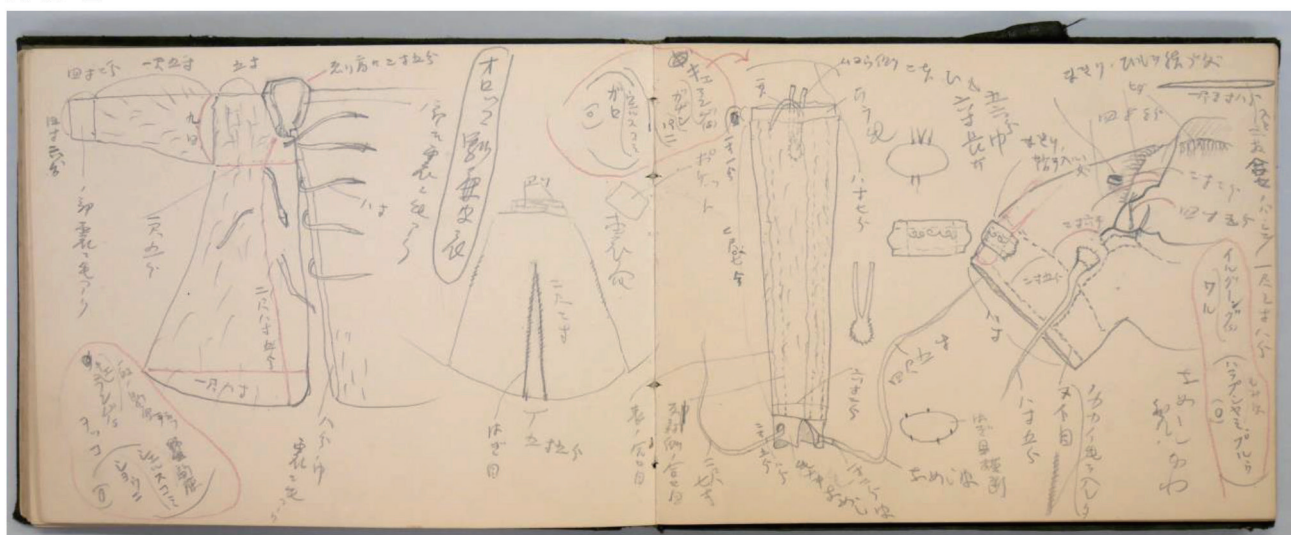
野帳 2_30



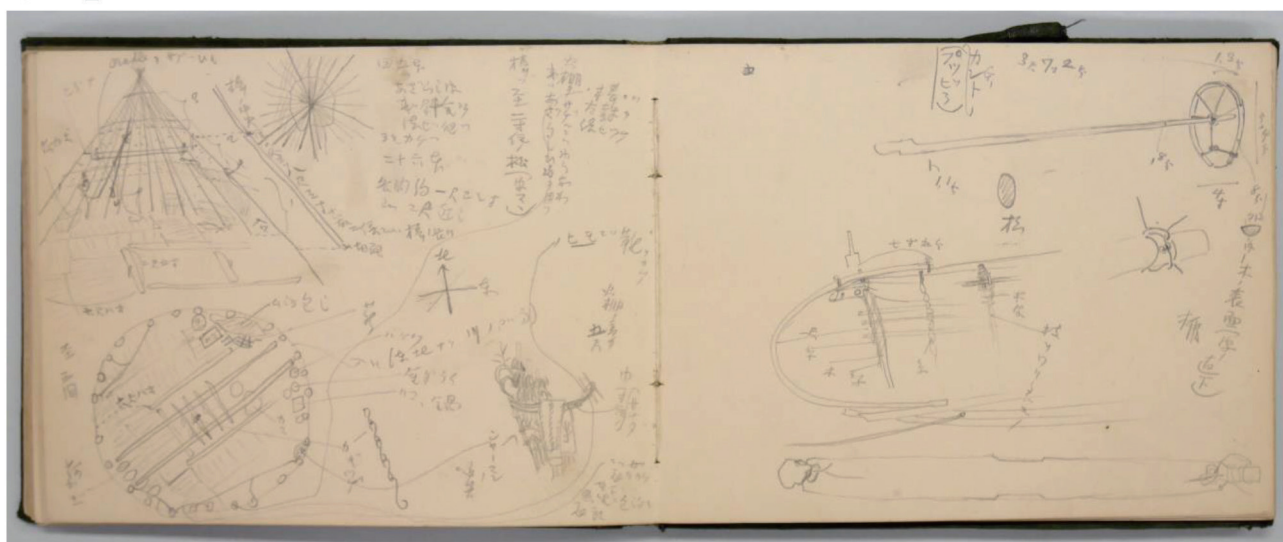
野帳 2_31



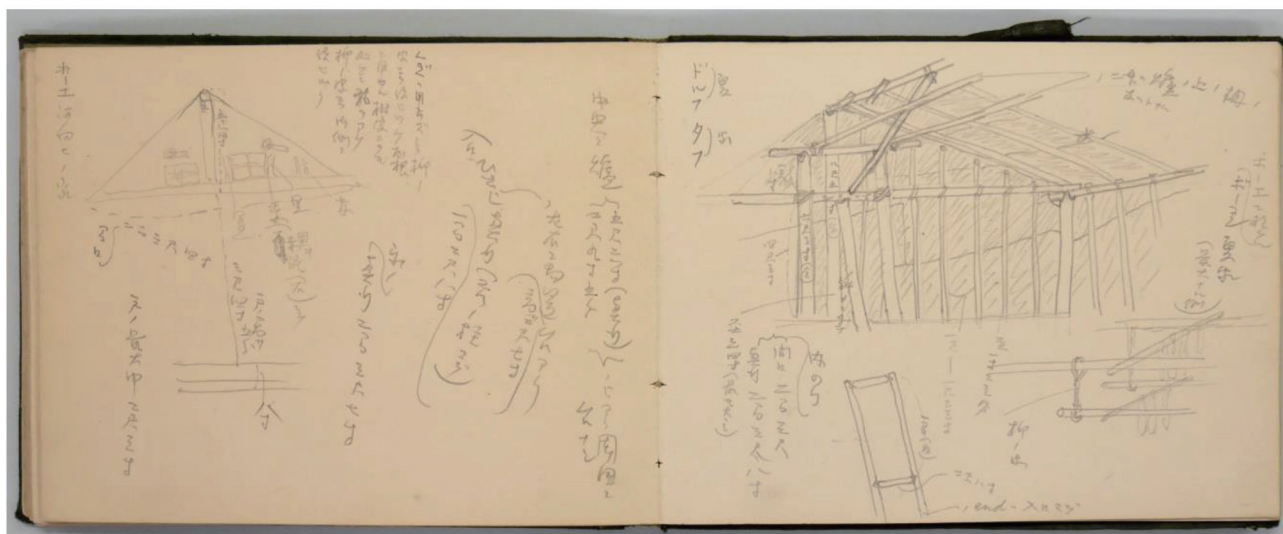
野帳 2_32



野帳 2_33



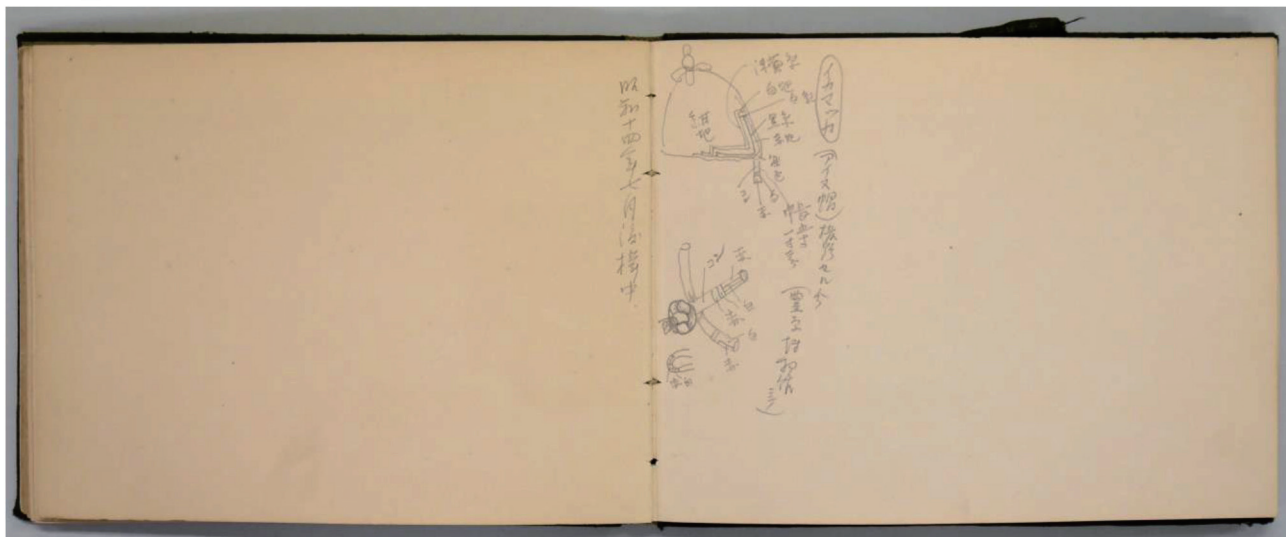
野帳 2_34



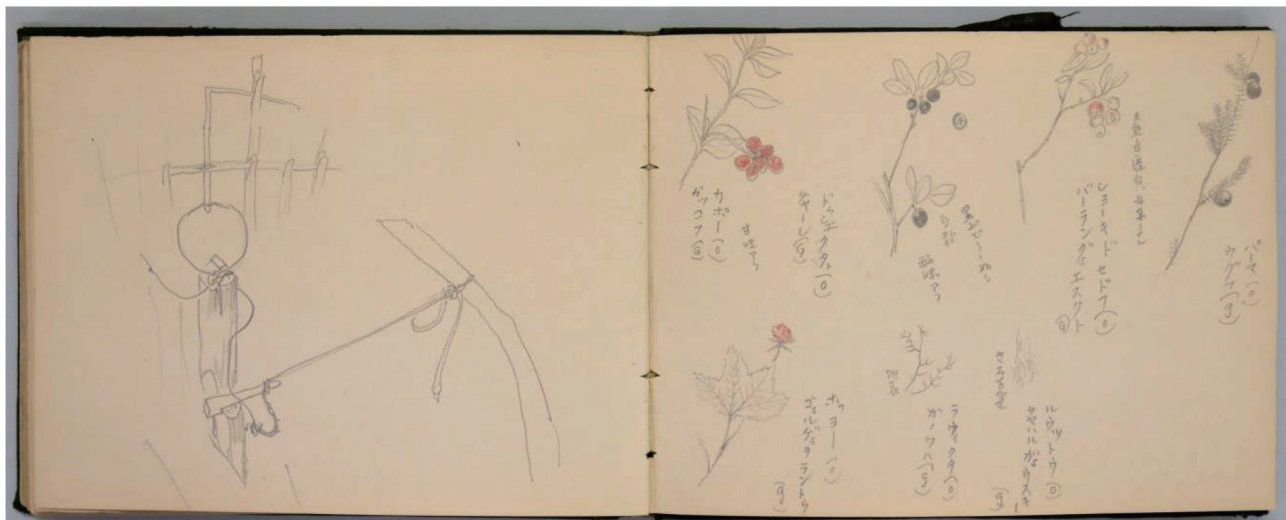
野帳 2_35



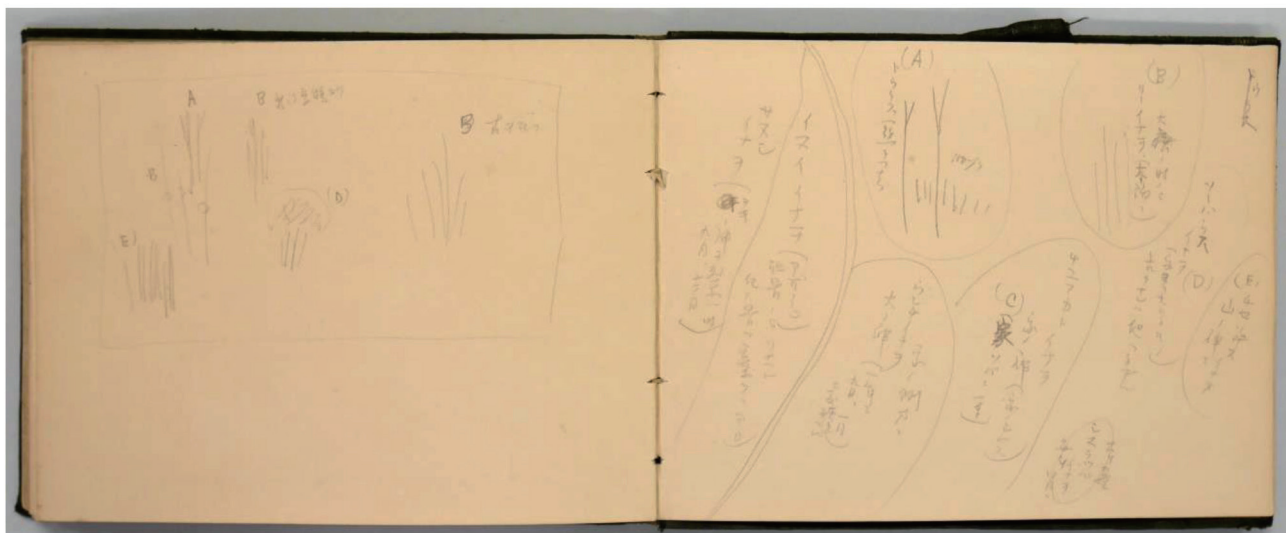
野帳 2_36



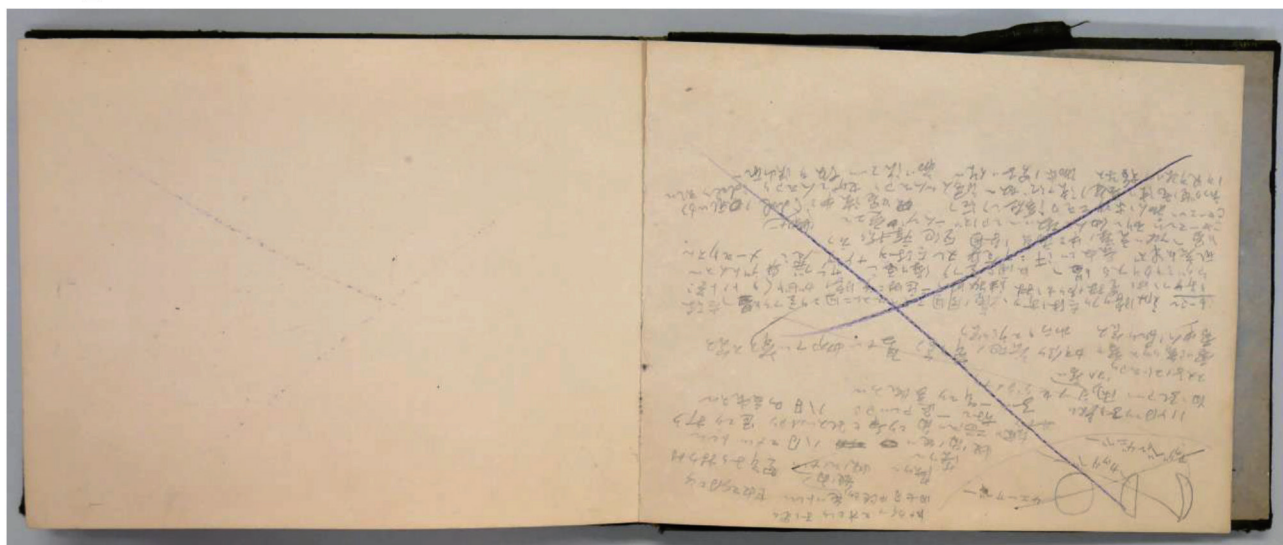
野帳 2_37



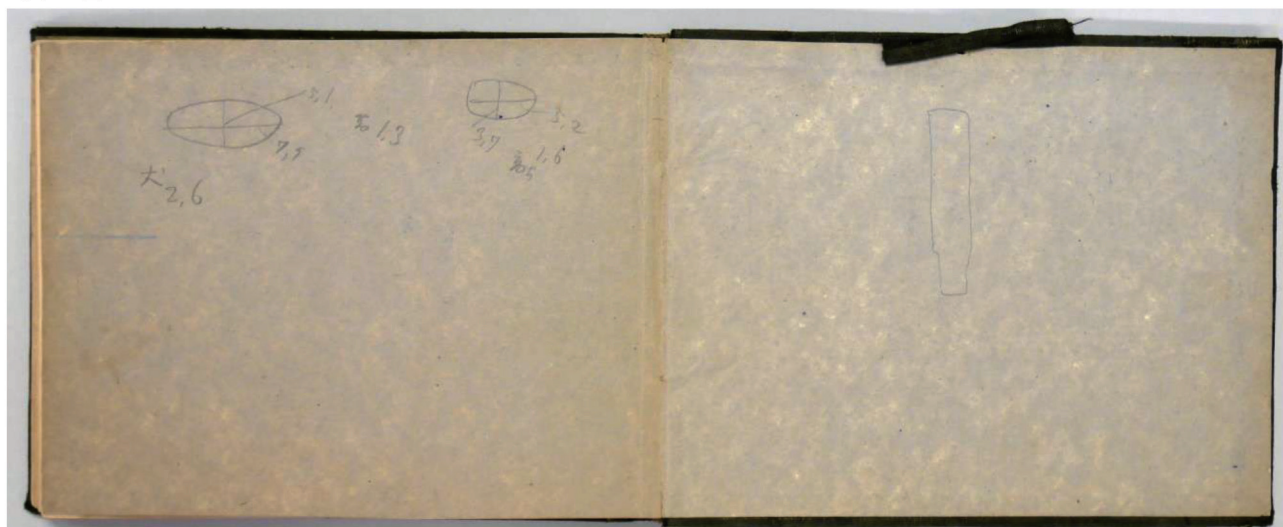
野帳 2_38



野帳 2_39



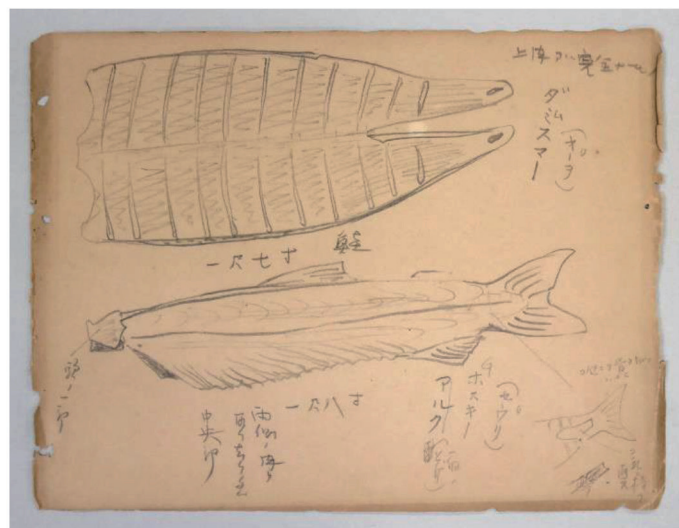
野帳 2_40



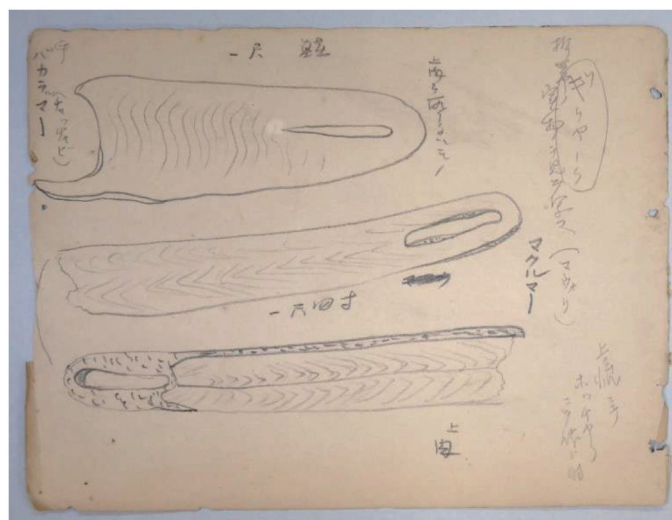
野帳 2_裏表紙



野帳 2_41_1



野帳 2_41_2



野帳 2_42

